

在大學院加藤玄智著
文學士

宗教之將來

京都 法藏館藏版

宗 教 の 將 來

緒

言

余二豎の故を以て姑く世と交を絶ち、静かに俗塵の紛

囂を磔川の清溪に滌ひ、超然自ら養ふもの月餘、一夜偶

々余が柴扉を叩きて松徑の寂寥を隣々の車聲に破る

者あり、忽ち刺を通じて頻りに謁を請ふ、乃ち燭を秉り

て之れを座に延き以てその來意を質だす、客曰く我れ

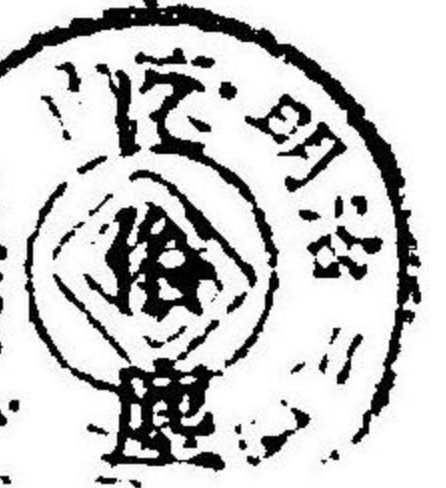
近日我が信念に於いて自ら安んぜざるものあり、益々

深く内に自ら省みるに至りて疑團逾々多く、畢竟その

底止する所を知らざらんとす、此に於てか講演に雜誌

に或は佛教家の言論を聽き或は基督教徒の説を質だ

す、而も是れ又聞き了はりて茫漠何等の心に得る所無



一、然而て等しく基督教と稱すと雖その所謂基督教なるものゝ中には舊教あり新教あり、舊教徒は新教徒を目して罵詈譏謗殆んど至らざる所無く之れを惡魔外道視し、新教徒は又舊教徒を貶黜排斥して固陋なり偏僻教主基督の聖旨と相距る甚遠き者なりと謂ひ、兩者の反目疾視は頗る甚しきものあり、而て又等しく新舊兩教徒と稱するものゝ中に於ても又幾多の小派別ありて存し、紛々擾々その説く所頗る徑庭異同して相一致せざるもの多し、又更らに之れを佛教に見んか、佛教各派又互に分裂しつゝありてその間に何等の統一ある無く、漫然として各宗各派は自家所奉の教理を以て

唯一最上の佛教なりと斷じ、各自教界の一方に割據して他を睥睨しつゝあるは更らにも云はず、その所謂佛教家中の碩學高德と稱せらるゝ所の人によりて、或は佛教を以て全然哲學なりと謂ひ自家教理の基督教に對して頗る哲理に富み、智者學者の尊信す可き萬國無比の最良宗教眞理宗教哲學宗教なりと誇稱せらるゝかと思へば、又忽ち前説を翻へして佛教は宗教にして哲學に非ずと云ひ、既に佛教は宗教にして哲學に非ざるが故に、感情的にして智力的に非ず、從て佛教の本性眞相は感情に在りて存し、智識理論に由るものに非ざれば、如何に科學哲學は佛教を攻撃し以て之れを破

壞し去らんとするも、科學哲學は佛教の法城を今日迄寸毫も陥落する能はず、蓋し佛教は無限なる人智以上の佛智に淵源し、科學哲學は單に有限の人智に基因し、そのものなるが故に、科學哲學は如何に進歩するも、それは到底能く佛教を泯滅顛覆する能はざるものなりと、かゝる見解は主として現今最も勢力ある佛教の諸學匠間に多く見る所のものなり、然るに今又更らに佛基兩教以外に在る門外の學者に就いて之れを問へば、則ち曰く宗教は迷信なり神佛の存在と謂ひ地獄極樂の有無説と云ひ、因果應報談と云ひ皆な等しく人智の幼稚なる野蠻未開の人民の空想上に描き出だせる妄想

の産物たるに外ならず、然れば宗教の人智の進歩と與に全然泯滅に歸し去る可きものなりと、此に至りて我は全然之等諸説の何れを是とし何れを非とし何れを正とし何れを邪と爲す可きか殆んど適從する所を知らず、已れ自その判斷に苦しみ、從來の信念は俄然茲に土崩瓦解の不幸に陥るに至れり、而も尙未だ健全なる新信仰の樹立を見るに至らず、之れが爲めに我精神は近頃悒鬱懊々として平かならず、日夜煩悶痛苦措く能はざるものあり、然るに一夕偶々翻然として悟とる所あり、惟へらく彼れ等基督教徒の牧師宣教師や佛教の僧侶等は、各皆或は基督教或は佛教の如き一教一宗

に屬しをるものなれば、勢ひ之等一教一宗の利害得失を以て自己の責任と爲しをるものならざる可らず、然れば彼等は自らその各自屬する所の宗教の爲めには、その説が眞理なるも非眞理なるも正しきも邪なるも兎に角その説の爲めには辯護の勞を執らんとするに至るは人情の實に然らしむる所のものとす、若し又一步譲りて彼等宣教師僧侶輩に於ては、自らそを心得ながら、尙斯かる強辯的附會説を成すの私心なしとするも、彼等は殆んど生來該宗教に由りて養成せられをるものなるが故に、知らず識らずの間その思想に感化影響せられつゝあり、之れが爲めに心眼眩惑爲めには非

も是と觀し曲も直と見誤るの道に陥あるを免れず、從て自己はその教理の謬れるを發見し得ずして之れを眞底正當なるものと信憑しをるの結果、遂に畢生の力を盡くしてその教を辯護せんと企つるに至るも亦是れある可し、然るに今又更らに宗教には全然門外の人たる世間の學者にして、宗教に就きては一の考察をも爲したると無くして唯漫然自己皮想の觀察に由り、宗教を目して迷信なりと排し野蠻時代の遺物なりと黜け去るに至るは、蓋しその判斷の正當適確ならざる固よりその所、此に於てか我は果して何人に往きてか以て宗教の説を聞かんや、我れ果して何んの人にか適從

して我安心立命の最大問題人生の第一義たる宗教を學ぶを得や、然るに偶々傳へ聞く先生が一意専心古今東西の諸宗教を比較研究して、科學的眼光の下に公平無私一切の宗教を批評し、以て健全なる新信仰の標準基底を考覈闡明せられつゝありと、此に於て我が前きの憂は忽ち喜と化し前きの悲みは忽ち樂と變じ、我心の苦悶懊惱は半ば雲と散じ霧と消ゆ去りたるの感あり、且つ先生甚能く客を遇すと、是れ我が今夕先生の居を訪ひ先生を煩はしたる所以なり、嗚呼先生請ふ我が爲めに平素懷抱せらるゝ所のものを開きて之れを我れに施し、我宗教に對するの疑團を解き、以て速かに我

れをして安心立命の大安慰を得せしめよと、余や客の言を聞き終はりて、客の余に對するの要求の頗る過大なるに驚き、不肖淺學不徳、人に語るの識無く、人に教ゆるの徳無く、斯かる大問題の人格的解釋たるの器ならざるを耻ぢ、覺ゆず慙然として自失するもの焉を暫らくし、遂に固辭する再三再四、而かも客の督責益々急なり、此に於てか余や遂に客の熱心とその求道の篤志とに感奮し、思はず宗教上に於ける余が平素の所懷二三を口外し、以て客の参考に供するの止むを得ざるに至れり、時に童子偶々坐側に在りて余が言を筆記し、積みて章を成す、是れ則ち本書なり、然れば本書は固より余

十
が一夕來訪の客に對し主客坐談の結果たる一場の坐談に過ぎざりしものなれば、余が意を盡くさざるもの固より多く、勿論之れを以て敢て梓に上ぼすの意志無かりしと雖、客が熱誠至實なる要求に由りて客と同様の感を抱く者の爲めに、是非之れを世に公けにす可しと迫まられしを以て、余や止む無く之れを以て、江湖に見ゆるに至れり、然れば余の學淺く識足らず徳薄く才鈍く而も却て斯かる大任を親らせしの事に至りてはその責固より余に在りて存す、若し夫れ余が過去現在及び將來の宗教に關する意見の稍詳細なるものに至りては、昨夏上梓せし宗教新論一部あり、若し一讀の榮

を賜ひ余が蒙を啓かるゝあらば幸甚。

于時明治三十四年一月

礪川の蘿門に松月を踏みて客の去るを送りし
の午夜孤檠明滅の下に於て

加 藤 波 水 識

目 次

第一章。我邦に於ける宗教界の現状

第一節 現今の宗教は果して迷信と何等の擇ぶ所ある乎

第二節 現今の宗教と科學哲學上の智識との背馳

第三節 現今の宗教は吾人の道德上に幾何の効果を與へつゝある乎

第四節 現今諸宗教の儀式は果して吾人の精神として満足せしめ得る乎

第五節 我邦現今の人民は如何なる精神的根本

主義を有する乎

二

第二章 輓近歐米諸國に於ける宗教界の新氣運

第一節 自然科學の進歩

第二節 交通機關の整備

第三節 東邦民族の宗教に關する新光明

第四節 古代民族の宗教と蠻族信仰との研究

第五節 基督教聖典の高等批評

第六節 輓近歐米の倫理運動

第三章 宗教の本義

第一節 宗教は果して迷信なる乎

第二節 宗教と迷信との區別

第三節 宗教は健全なる同一人性の必然に出づ

第四節 宗教は人事的現象なり

第五節 宗教も亦進化するの性質を有す

第四章 科學哲學と宗教との異同

第一節 常識と科學との區別

第二節 科學研究の二方法

第三節 科學とは如何なる智識なる乎

第四節 科學は若干の假定上に成る

第五節 哲學は吾人々類の究竟的智識なり

第六節 哲學を無視せるの科學は空中の樓閣なり

三

第七節 科學を顧みざるの哲學は空想なり

第八節 哲學は吾人に最終の安心立命を與ふる

の證信なり

第九節 哲學と宗教との異同は那邊に在る乎

第十節 哲學は吾人に安心立命を與ふるの證信

としては智情意全作用を以て構成す

第十一節 常識及び科學哲學と宗教との關係

第十二節 以上の立脚地より觀察したる從來の

諸宗教

第五章 宗教と科學哲學との衝突は那邊に原因する乎

第一節 現今の社會に於ける人智の懸隔

第二節 教學の衝突は漫に宗教を神聖化するに由る

第三節 現今歐洲に於ける教學の衝突

第四節 現今我邦に於ける教學の衝突

第六章 科學哲學と宗教との衝突は如何にして調和す可き乎

第一節 宗教の超人智主義の謬妄

第二節 宗教の科學的研究を忌避するの姑息的調和論

第三節 宗教を感情一方の保護に托するの危険

第四節 健全なる宗教的信仰は吾人の智情意全作用なり

第五節 健全なる教學はその二者果して衝突す可きものなる乎

第七章 健全なる信仰の樹立は我邦目下の最大急務なり

第一節 従來の諸宗教に對する吾人信念の不滿

第二節 宗教家の腐敗墮落は信念界不穩の一要因なり

第三節 政治上の改革に伴ふ宗教の刷新

第四節 我邦に於ける東西思潮の二大柱流の集

注

第五節 ユニテリアン及び所謂佛教の自由主義

第六節 最近我邦に於ける倫理運動

第七節 人心の根本主義を成す可き宗教

第八章 將來の宗教

第一節 佛基兩教の一長一短

第二節 佛基兩教の調和

第三節 健全なる科學哲學の智識

第四節 宗教に於ける道德的方面の尊重

第五節 儀式の簡潔

第六節 迷信的宗教は果してその痕跡を社會に

終

勦絶し得可き乎

宗教の將來

加 藤 玄 智 著

第一章

我邦に於ける宗教の現状

第一節

現今の宗教は果して迷信と何等の
擇ぶ所ある乎

先づ現今我邦に行はるゝ所の宗教はと問へば、何人も
指を佛教に屈す可し、實に我邦の佛教や衰へたりと雖、
その宗派の數より云ふも寺院の多寡より考ふるも僧
侶の多少より察するも、優に我邦は佛教國たるに恥ぢ
ざる所のもの、各宗の管長は皆な敕任官を以て待遇せ

二
 られ、各宗寺院は等しく皆な無税地に住し、幾多優渥な
 る政府の禮遇に浴し、嚴然として一見如何にも我邦人
 心の樞機を掌握しつゝあるが如く、佛教出でずんば蒼
 生を如何んせんと云ふの有様なりと雖、今その裏面に
 立ち入りて仔細に之れを窺ふときは、實際是等宗教家
 の宣布しつゝある所のものは陳腐怪誕の說法にして、
 彼等の行動云爲しつゝある所のものは死人の取り扱
 ひか、又は何等の意味をも有しをらざる年忌供養の讀
 經に外かならず、その他加持に祈禱に護摩に御守符に、
 一として健全なる吾人宗教心の涵養に資するものあ
 ると無く、滔々相率ゐて天理蓮門の淫祠邪教の群に入

三
 らんとしつゝある所のものは、恐らく現今の佛教なら
 ん、斯くの如き迷信佛教が下等社會の愚夫愚婦は姑く
 例外として、中以上の智識ある國家の元氣とも成る可
 き中學卒業以上の人間の精神を風化する能はざる固
 よりその所、矧んや中以下の人民に在りても新聞に演
 説に幾多社會教育の結果は、最早や心底斯かる迷信佛
 教を奉信しとるもの殆んど是れ無く、單に習慣の惰力
 に促がされて父母昆弟の死するや寺に詣りて僧侶の
 引導を請ひ年忌供養を舊慣的に營みとるに過ぎず、然
 れど日に頻繁となれる社會に在りては、斯かる無意味
 の宗教的儀式は成る可く省畧せんと企つるもの多き

を致せるは理の當さに然る可き所、殊に葬式の如きも現今に在りては僧侶の讀經はほんの附けたりにて、こは恰も宴會の席上に於ける藝妓の音曲に類し、葬儀の眞目的は遺族の焼香以て死者を痛むに在るなり、遺族の焼香以て死者を傷むに非ずんば親戚故舊の祭文朗讀に在りて存し、會葬者亦一たび此式を終ふれば忽ちにして退場し、僧侶獨りその跡に取り殘こされて、悄然として自己も解し得ぬ無意味の經文の讀誦に物理的の空音を弄しとるものなり、嗚呼考へ來れば是れ眞個に一幅の好戯畫たるに非ず乎、特に生き馬の目を抜くてふ東京若くは横濱の如き地方に在りては、奸商等往

々葬式の供奉に豪奢を盡し父母昆弟の終を送くるの葬禮を利用して、自家商店の廣告用に供し、曰く放鳥何十籠生花何十對白丁幾十人僧侶幾百人と、噫彼等は之れに由りて世人をしてその商賣の富豪にして該店の繁昌を知らしめんとす、豈に言語道斷沙汰の限りに非ずや、僧侶も亦三界の大導師たる天爵を擔ひながら、御布施次第で五條七條の有様なれば、信徒が葬式を以て商店の廣告用に充てんとするに至るも亦決して怪むに足らざるなり、斯く考察し來れば現今我國に於てその多數の信者を有し、公認教の特權を得んと希望しつゝある佛教は、果たして能く幾何の人心を支配しつゝ

あるが、吁嗟現今我邦に行はれざるの佛教は祈禱佛教なり御符佛教なり護摩佛教なり、而てその佛教僧侶なるものは多くは是れナンボウの首領なり墓所の番人なり年忌供養の周旋屋に外ならず、一言以て之れを謂へば我邦の佛教は今や全然迷信と化し去りたるものと謂はざる可からざるなり、然れど今更らに眼を轉じて基督教々徒の社會を一瞥するに、その間儘二三の有識者無きに非ずは恰も佛教界に於ける二三の高僧碩徳あると一般なれども、その宣教師牧師傳道師等の多くは是れ依然基督の奇蹟を説き天に在します神を稱へて畢竟迷信の弘道に従事しつゝあるはその爲す

所の有様こそ異なれ宛然たる佛教家の迷信に陥ありとれると好一幅對と謂はざる可からず、我邦に於ける佛基兩教の現状既に斯くの如し、是れをしも我國の宗教は迷信なりと稱せずんば將た之れを何んとか謂はん將た之れを何んとか謂はん。

第二節 現今の宗教と科學哲學上の智識との背馳

科學哲學の諸智識の進歩は十九世紀に於ける特に著明なる新現象なり、科學は實驗觀察の確實なる方法に依據して各自部門を分ち分業的に緻密なる世界解釋の巧妙に到達せんと欲し、哲學は諸科學が實驗觀察の

下に得來たりたる確實の諸智識を基礎として更らに宇宙の秘を闡き造化の妙を探らんと努めつゝあるものなり、然れば十九世紀の科學思想の影響を蒙れるものは小學に通ふ三尺の童子と雖、最早や奇異なる聲して天に叫ぶ御祈禱に感じて早魃に雨降るとも信ぜざれば、不動尊の御前に焼く行者の護摩の力にペスト、コレラ等疫病の流行を止めたりとも思はざる可く、雨の降らんが爲めには水蒸氣の凝收を要し、疫病を防がん

とせば衛生に注意するの外他に良策無きを辨知するに至れり、則ち苟も水蒸氣にして一朝凝收せんか祈らずとも雨や降る可く、人々衛生に注意して個人の攝

養其宜きを得ば疫病神は護摩を焼かざるも尙退出し去る可し、鬼は外福は内と呼ぶも必しも鬼去りて福來らず、不淨の俗僧が無意味なる讀經の物理的空音は到底亡者をして往生成佛を遂げしむ可しとも思はれず、扱ては閻魔の廳血の池地獄針山蓮華の中に佇立せるの佛、木の葉に乗じて海に浮べる耶蘇六日間に於ける神の天地創造神の末日審判靈魂てふ一種特別の心塊、此等の思想は果して能く現今の科學哲學の諸智識に背反せざるか、現今の科學哲學は其基礎を確實なる人智の經驗に求め、之れに反して從來の諸宗教は荒唐不稽の神佛を藉り來りて空想的に人世を解釋せんとす、

兩者立脚地の相距る間に天淵霄壤のみならざるなり、果して然らば吾人は這般兩種の人間の智識中二者果して其何れに歸服順隨す可き乎、吾人大に惑ひ無き能はざるなり、然れど退いて考一考せよ、吾人々類は尙依然其人類たるを免れず、人類以外の不可思議物を求むるに及ばず、哲學者シャロンの謂ひしが如く人の研究す可きものは人の外ある能はず、然れば苟も吾人にして人類たる以上は、吾人は彼超人間の智識に依頼するを罷めて健然なる人間的智識の指導に従はん哉。

第三節 現今の宗教は吾人の道德上に幾何の効果を與へつゝある乎。

我邦現今の宗教や殆んど迷信なり、科學哲學の確實なる經驗的智識と甚だしく相背反するものなり、然れば現今の所謂宗教家なるもの、謂ふ所は、愚夫愚婦は姑く措き、苟も小學教育をだに受けたるものは誰れか又眞面目にそを信奉せんや、何んとなれば彼等の説く所のものは一世紀前の智識にして現今の科學哲學の智識に照らしては寸毫の價值無き眞に小兒の啼を止むるに過ぎざるものなればなり、然れば吾人が眞面目に信受し得ざるの宗教が吾人に訓ゆる所を以てしては、吾人何ぞ能く眞面目に滿幅の全精神を斯教に捧げて之れが爲めに行動云爲するを得んや、然れば斯かる宗

宗 教 の 將 來

教が最早や今日吾人の道德を支配するの勢力無き亦實に怪むに足らざるなり、彼の天堂の説地獄極樂の教耶蘇の昇天神の末日審判、一切此等吾人の智識上に正當なるものと見做され居たるの昔時に在りては、吾人の一舉一動は此の思想に由りて左右せられ吾人の道德心は之れに由りて鼓舞せられ活動せられつゝありしと雖、現今の如く吾人は一切此等宗教に説く所を黜けて信憑せず又之れを信憑し得ざるに至りては這般の宗教は争でか能く吾人の道德的行爲の指導者たるを得んや、然れば現今我邦に於ける二三佛教徒がその佛敎主義の下に、諸種の社會的慈善的事業に従事せん

宗 教 の 將 來

として偶失敗に歸して終はる所以のものは、現今に於ける最早彼れ等の道心がその所謂佛敎主義の爲めに不惜身命以て活動せんとするに至る迄に熱衷せしむるの効力を有せざるに職由するものたらずんば非ず、然れば現今の佛敎家動もすれば則ち曰く、吾人は宜くその佛敎上に於ける信念を養成す可しと、然れど吾人は重ねて彼等に問はん、彼等は如何なる佛敎の信念を有しその信念の爲めには身心を賭して進退周旋行動云爲せんとする底の大決心大勇猛心を産み出し來りたるか、彼等にして苟も斯かる信念を有すること無くして、徒らに信念の修養を叫ぶ愚に非ずんば則ち狂な

宗 教 の 將 來

り、何んとなれば既に彼等の絶叫して修養せんとする所の信念なるものは何處にも存在す可きものならざればなり、果たして然らば斯かる根本的金剛堅固の大信心なるものは如何にして之れを得可き乎、是れ彼等に取りては實に至大至要なる問題ならん、然れど余は今此問題に對して左の如く謂ひ措くに止めんとす、曰く斯かる根本的大信念なるものは彼の新舊兩思想を姑息的に彌縫したる一時間に合はせの思想を以てしては到底不可能なるものにして、今や信念界は必ずや正にその根本的の一大治術を要するの秋なりと。

第四節 現今諸宗教の儀式は果して吾人の

精神をして満足せしめ得る乎

宗 教 の 將 來

以上論明せるが如く我邦に於ける現今の諸宗教は吾人の智識上最早眞面目に吾人精神上の満足を博する能はず、從て斯かる宗教を以てしては到底吾人行爲の規矩準繩と爲す能はず、吾人の道德的行爲は到底之等宗教の教ゆる所を以てしては到底能く之れを律し行く能はざる所のものとす、果たして然らば之等宗教の執行せる一切の儀式が吾人に取りては最早や何等の意味をも有せざる虚形虚式と化し去るに至りたるや又必然の結果なりと謂はざる可からざるなり、是れ現

宗 教 の 將 來

今我邦に於ける僧風頹敗したるは一は僧侶が無學不識佛教の眞意を知らざるに由るものありと雖、又彼れ佛教が現今の科學哲學發達の結果彼れ等僧侶をして全幅の精神を籠めて行動云爲せしむるに足るの勢力を缺けるの致す所ならずんば非るなり、若又是れを信者の側より觀察せんか尙一層甚しきものありて存し、特に東京に於ける葬儀の式年忌の供養等が一切無意味の行動云爲と化し去り、僧侶の讀經の如きは一に宴會に於ける藝妓の歌舞音曲に過ぎざるの役前を爲すに至たりたるが如き、彼の從來の佛教なるものが吾人々類の精神界の支配權を失ひたると同時に諸有佛

宗 教 の 將 來

教的儀式が到底從來の如く吾人々類の精神を満足せしむる能はざるに失墜し了はれり是れ豈に現今に我邦宗教社會の現状に非ずや。

第五節 我邦現今の人民は如何なる精神的根本主義を有する乎

現今我邦に於ける宗教が之れをその智識の側より云ふも道德に照らして考るも儀式上より論ずるも、一も現今進歩せる吾人々類の精神を満足するに足るものあると無し、此に於てか我邦の人心は俄然としてその立脚の基底を失し人は何等の主義も無く何等の定見も無く無信仰無節操唯飄然として醉生夢死しをるの

十八
 み輕佻風を成し浮薄俗を破り浮萍や今日は向ふの岸
 に咲くの眞個に憐はれむ可き状態に墮落しをるもの
 は現今我邦の精神界の實況なりとす、彼等は今や眞に
 精神的パンに餓はたるもの而かも彼等は如何にして
 そのパンを得可きかを發見し得ざるものなり、泰西新
 來の諸智識は蕩然として彼れ等の舊信仰を一掃し去
 りたり、西洋新來の科學哲學の諸智識は彼等の宗教を
 目して迷信なりと貶黜し去りたり、而かもその言や必
 しも虚ならずして彼等が西洋の科學哲學に親炙する
 に至りては最早到底在來の舊信仰を以て満足したる
 能はざるの悲運に遭遇し來たれり、然れど之れと同時に

十九
 に西洋新來の宗教は果して斯かる危期に際し能く彼
 れ等舊信仰の破壊せられたるの缺を補ふに足るかと
 云ふに、彼等は一時實に然か信じられたるとありしと
 雖、尙深く邦人が西洋の事情に精通するに至りては西
 洋に於ける在來宗教の遭遇しをれる運命は又實に現
 今我國に於ける在來宗教の蒙りたる不幸と何等の徑
 庭あるを見ざるを發見せり、此に於てか邦人の思想
 は益々動搖せり、彼等の信念は逾々その確立の根底を
 失墜したり、嗚呼我國民思想界の現況夫れ斯くの如し、
 之れをしも無主義無信仰の國民と謂はずして將た何
 にとか謂はん、然れど斯くの如く人々皆な無主義無信

仰にして精神上何等の根本主義を有しをらざるは果して悦ぶ可きの現象なる乎將又愁ふ可きの現象なる乎、余を以て之れを見るに精神上の根本主義に缺如せるものは恰も一國に於てその帝王を缺けるが如く一家にその主人無きに等しく、斯かる人物はその生涯に何等の統一も無く何等の信賴する所も無く輕佻浮薄名利是れ争ひ毀譽是れ追ふの感覺的快樂主義や唯物的拜金主義の跳梁に終はり、その極人生の眞意義を没却し理想の高遠を悟らず甚しきに至りては金錢の爲には國を賣り刃を返へして戰ふものを生じ來るに至らんとす、果して然らば是れ豈に眞に邦家百年の末に

宗 教 の 將 來

慮るありて聊か杞憂に堪はざるものあり、豈に寒からずして肌に粟する無しとせんや、是れ余の一日も早く健全なる信仰の我邦人間に樹立せられんとを且暮翹望して止まざる所以にして、不肖自ら揣らず卒先以て此混沌たる我邦信念界の今日に際し、如何なる信仰が是れ實に健全なるやを究明して聊か將來に樹立せんとする精神上の根本主義に資する所あらんを期し、之れに由りて以て邦家に竭くさんとする所以なり、是れ余の僭越自ら省みず叨りに客の需めに應じて宗教に關する余が平素所懷の一端を公けにするに至りたる因由なりとす。

宗 教 の 將 來

第二章 輓近歐米諸國に於ける

宗教界の新氣運

第一節 自然科學の進歩

近世に於ける自然科學の進歩は實に驚く可きものありて存し、自然科學の光明一たび我學術界を照らすに至たりしより吾人々類の思想は頓みに一轉するに至れり、即ち中世末より近世初に懸けて英國にロージャ、ベリユンとフランス、ベリユンとの二氏で大に實驗觀察に基ける自然科學の研究を稱道し、教會の口碑的傳説中羅馬法王の教權服従を非認せしより、コバーニクス、ケプラー、ガリオ、ニュートン等の自然科學者相

宗 教 の 將 來

宗 教 の 將 來

踵いで輩出し、從來の天動説は廢たれて地動説起り地球中心説を排して太陽中心説はその勝を學界に占むるに至れり、然り而て彼の地平説は破れて地圓説は凱歌を奏し來たり而て彼のコロムブスの亞米利加を發見するに至りては逾々その眞理たるを實證せられたり、加ふるに本世紀に至りてダーウソンの進化説出づるに及び從來の宗教的的人生觀世界觀に大恐慌を與へたるを頗る多かりき之れを要するに近世に於ける自然科學長足の進歩は天地を一變し世界を一新せしものと稱するも毫も過言に非るなり、此に於てか汽車汽船の發明となり電信電話瓦斯電氣の發明

となり人生諸般の生活上に偉大なる變造革新を來たすに至れり、自然科学發達の結果は嘗に之のみならず吾人の哲學上にも至大なる影響を及ぼし、從來哲學は萬學之母と稱して希臘のアリストテレス氏以來傲然として一切科學の冠位に在りて能く他の諸科學を統御し來たり、哲學々説の説定ありて初めて此哲學々説の立脚地よりして餘地の諸科學研究の事項を説明解釋し去らんと試みせりしが、近世殊に十九世紀に於ける自然科学長足の進歩の結果は學者をして遂に哲學をして先づ自然科学の分業的研究の結果に待ち一切の科學を組織統合して此に初めてその哲學なるも

宗 教 の 將 來

のを構成せしむるに至れり、然れば從來の學術界に在りては哲學先づありて而て後ち初めて科學なるものありしなり、之れに反對して最近の學術界に在りては科學ありて而て後ち哲學あるに至れり、此上下前後の倒逆に至りては豈に至大なる科學進歩の結果に非ずとせんや、本世紀に於ける自然科学發達の結果夫れ斯くの如く、その影響の及ぶ所人生社會百般の事物に迄波及し來り又敢てその實際界たると理論界たるとを問はざるに至れり、斯くの如き偉大なる自然科学進歩の結果は彼の從來の宗教が教ゆる如き人格的天神の存在攝理を信じ神子の奇蹟を信憑する能はざるに至

宗 教 の 將 來

れり、此に於て之等の自然科学は從來の宗教的宇宙觀や人生觀に影響せざらんと欲するも豈に得可けんや、否な之等自然科学の經驗的確實の基礎を有せる諸智識は實に遠慮會釋無く舊來の宗教的信念と撞着矛盾しとる所のものは一切之れを擧げて破壊し去るに至るは又實に止むを得ざるの時運にして、現今信念界動搖の結果はその原因一は確かに近世に於ける自然科学の進歩に在りて存すと謂はざる可からざるなり。

第二節 交通機關の整備

自然科学發達の結果は各種交通機關の整備を促し來たり、汽車汽船の便は今世紀に至りて東西兩洋の距

離を短縮し世界の面積を減少したるやの感あり、矧んや彼のシベリヤ鐵道その功を竣へパナマ地峽の開鑿にして一朝その落成を見るに至らんか、東西兩洋の交通は益頻繁となり來る可きは今日より之れを豫想するに難からず、先是彼の亞非利加のスエズ運河の開通は歐洲大陸より印度支那に航するに亞非利加南岬を迂回するの愚を避けしめ、之れと同時に幾多の巨舶大船が歐洲より南北亞米利加を始めとして東西洋の諸洲に定期の航海を營みとれるは之れを彼のコロムブスが亞米利加を發見せんが爲めに太西洋を横斷するに憐れむ可き帆檣船を以てし、マゼランが世界の周航

宗 教 の 將 來

を自ら成就する能はず僅かにフランシス、ドレークをして初めて氏の遺志を繼ぎてその曠世の偉業を成功せしめたるが如きに比し來れば、現今に於ける交通機關の整備は吾人豈に實に之れを驚嘆せざらんと欲するも又得可からざるなり、今斯かる交通機關の整備と共に東西交通の頻繁を致し來たりたるより、その結果東洋國の宗教をして歐洲の信念界に紹介せしめ茲に又彼れ歐洲人の思想界に一大變動を惹き起こさしむるの一大動力を爲すに至れり。

第三節 東邦民族の宗教に關する新光明

交通機關の整備と共に東西兩洋の交通は益々頻繁を

宗 教 の 將 來

致し來たり東洋諸國の事情も漸く將さに彼れ歐人の了知する所と爲り來れり、此に於てか印度に在りて太古吠陁の神話より宇波尼沙土の哲學を初めとして印度の六派哲學より婆羅門教佛教等、基督教以外に一種深遠幽邃なる哲理に富める宗教の存在しをるとを發見して、その思想を高遠にその組織の偉大なるに驚嘆し、更らに眼を轉じて漢人種の宗教思想を窺へば此の處に於ては印度の如き哲學的理想の高遠に富み沈痛魁偉の宗教々系に接する能はざるも、その教や儒教あり道教あり實踐躬行を重んじて上下茫茫數千歲彼れ漢人種が日常の倫理道德を支配するその功績之れ

を歐米に於ける基督教に比するも決して遜色無き一
種の宗教ありて存するを發見するに至れり、此に於て
か彼れ等歐洲人は從來宗教とし云へば基督教の外に
は何等の宗教なるものあると無く、基督教のみ獨り眞
正なる眞宗教なり他は皆偽宗教なりと考へをりし見
解の頗る偏僻固陋の思想たるを自覺し來たり、爾來各
國民の古代宗教の比較研究は歐洲の學者間に重要視
せらるゝに至れり、然れど苟も各宗教にして若し一た
び比較研究せられて僻見を離れ不偏不黨科學的眞摯
の研究にその真相を明らかめられんか、何れの宗教と雖
各皆その長所を有すると同時に短所をも亦之れを具

備しをる所以を悟了するに至り、從て基督教獨り眞理
なるに非ず他の諸宗教にも又々眞理なるものありて
存し、眞理は基督教の獨占に非る所以を知ると同時に
基督教にも幾多の缺點ありて存するを自覺するに至
れり。

第四節 古代民族の宗教と蠻族信仰との研
究

東西交通の頻繁は西洋人をして東洋にも又一種侮る
可からざる高尚なる宗教思想ありて存するを知らし
むると同時に、是等諸宗教をその古代に遡りて研究者
察するの必要生じ來たり、その結果東西兩洋の古代宗

宗 教 の 將 來

教即ち東西古代の神話宗教の比較研究を促し來たり、印度の宗教と希臘の宗教は没す可からざる同一アールヤ族の古代思想の産物として存在するの事實を發見せしめ、歐洲のアールヤ族の産地として言語學上神話上に漸く明瞭ならしむるに至れり。之れと同時に現今南洋亞米利加等の各地に散在せる天然民族即ち蠻民の宗教を研究して、之れを古代神話上の宗教思想と比較對照し來り以て宗教なるもの、本質を科學的に究明せんとするの學者ありて輩出するに至れり。然り而て是等古代民族の宗教研究や現今の民間信仰の觀察やは、比較宗教學上に至大なる影響

宗 教 の 將 來

効果と與へその結果彼の基督教が唯一眞理の宗教にして神與の天賚に出づると爲すの説明は、全然その根底より破壊し去られ宗教亦人文史上に於て人事界の一現象なるの理愈々明かなるに至れり。

第五節 聖書の高等批評

既に基督教にして神與の天賚に非ずして又是れ人文史上の一現象たるに過ぎずんば、吾人々類の理性は能く基督教々理の眞否を甄別判知し得可きなり、此に於てか從來神聖犯かす可からずと爲しをれる基督教の聖書の本文を、科學的歴史的研究の方法を應用して聖書の年代や後人改竄の跡を考覈闡明して、聖書を批評

宗 教 の 將 來

的に研究せんとするの學者輩出するに至れり、之れを聖書の本文批評又は高等批評と稱す、是に於てか彼の基督教も從來僧侶等の思惟しをりしが如く唯一眞神の啓示に由りて起り聖書の初卷は神自ら筆を取りて手記せしとの傳説は全く破却せられ、アイツヒホルン氏の謂へるが如く、聖書も亦人間的に讀まれ人間的に吟味せらるゝに至り、而て聖書自らも却てそを好むの有様とは爲るに至れり。

第六節 歐米の倫理運動

近世特に十九世紀はカントの所謂批評の時代にして法律も君權庇護の爲めに學術の批評を免るゝ能はず

宗 教 の 將 來

宗教も神聖の秘雲に隠れて科學の批評を逃がらざるを得ず、事々物々に皆な彼の科學的批評の鑒識を免除せらるゝを得るもの無きは實に是れ本世紀の特有性なりとす、然れば基督教と雖何ぞ能く斯かる時世の風潮時代精神の向ふ所に抗するを得んや、由來宗教の事たる歐米に於ては恰も腫れ物にさばるが如く臭きものに蓋を爲しをくが如き取り扱ひを爲しつゝありしと雖、今や古代の宗教や蠻民信仰の比較研究は鬱勃として興起し來り聖書の本文さへ遠慮會釋無く學術批評の斧鑿を入れらるゝに至りしかば、その結果として基督教の長所短所は明から様に滿天下に暴露せら

來將の教宗

るゝに至れり、此に於てか吾人の宗教心は到底從來の基督教を以て満足する能はざるに至れり、加ふるに今世紀に於ける科學哲學の至大なる長足の進歩を爲せる、之等諸智識は滔々として一瀉千里長驅して基督教の教壘に薄り、席卷應さに法城を陷めんとしつゝあるもの、流石の基督教辯護の翹將たる媒介神學者なるもの、繙縦策も到底永く基督教の教運を持續するに足らざるの悲運に遭遇し來たれり、此に於てか氣銳の士早く既に此に見るあり老朽事に堪ぬざるの基督教と訣別して潔くも在來の教權を離れて直情徑行自家所信の主義を天下に實行せんと期するものあり、之れ

來將の教宗

を米國に初まりて今や既に歐洲全土至る所にその團合を見ざるもの無きに至りたる倫理運動なりとなす、然れば倫理運動なるものはその名稱や實に倫理を實踐躬行するの一結社の如く見ゆると雖も、その實多くは心に基督教の宗教を見捨て更らに新立脚地の下に健全なる新宗教の樹立を欲するの人士に由りて組織せられたる新らしき宗教團體に外かならず、然れば現今に於ける我國は勿論歐米各國を初めとして吾人の進歩せる宗教心は到底在來の教權に服従するのみにては満足するを得ずして、必ずや他に何等か一種の健全なる新信仰新宗教を要しつゝありて止む能はざる

ものとす、是れ豈に獨り我邦のみならず渾圓球上至る所の人民がその精神上のバにン、餒に何等か精神上の「アムブローシア」を得んと希望しつゝあるの所以を反證して餘りあるものに非ずや、果たして然らば斯かる健全なる新信仰とは果たして如何なるものなるか、請ふ余は以下數章に亘りて聊か辯明する所あらん。

第三章 宗教の本義

第一節 宗教は果して迷信なる乎

宗教は果して迷信なるか、宗教を以て恰も迷信の土塊の如く説き迷信を取り去れば宗教なるもの亦他に存在する能はざるものゝ如く考ふる者あり、故に曰く宗教は暗所を照らす螢火の如く科學哲學の太陽一たび出づるあらば宗教は忽ちにしてその火力を失ふに至り決して又存在するの餘地無きものなり、宗教は或は愚夫愚婦を導くの要具なる可きも智者學者には何等の用無きものなりと、然れば此説たる宗教を以て全然迷信と同一視し迷信たる宗教は愚夫愚婦には或は必

要なるも智識進歩せる哲人學者には寸毫の用無きものなりと謂ふにあるなり、然れど宗教は果たして迷信のみなるか、宗教の本性は迷信を外かにしては之れを見出す能はざるか、吾人尙未大に疑ひ無き能はず何んとなれば彼れ等論者の所謂宗教は迷信にして愚夫愚婦の外智者學者には何等の用無きものなりと謂ひ、以て之を確信して卓然として我れは何等の宗教をも信奉せずと聲言しとるも、余を以て之れを見ればそれは實に佛基兩教の如き成立宗教を信奉せずと謂ふに止り依然として矢張一種の宗教を信じとるものに外かならざればなり、然れば若し一切の宗教にして迷信たる

ものならば論者の所謂佛基兩教を信奉せずと謂ふ信仰も又迷信なりと謂はざる可からず、果して然らば論者は迷信なるが故に我は宗教を信奉せずと謂ひとるにも關はらず依然一種の迷信を信奉しとるものと謂はざる可からざるなり、之れに由りて是れを觀れば宗教なるものは單に迷信の頽塊のみに非ざるや知る可きなり、果して然らば迷信と宗教との區別は那邊に在りて存するが是れ實に吾人の眞摯なる研究を要する所のもの。

第二節 宗教と迷信との區別

宗教と迷信とは一見して何人も能く容易に之れを區

來 將 の 教 宗

別し得るものありて存し、天理教蓮門教の御祈禱御水は何人も少しく智識あらば等しく之れを迷信なりと謂ふに躊躇せざる可く、佛教や基督教の如き宗教は何人も全然之れを迷信なりと斷言し去るは又聊か躊躇するものあらん、果して然らば此點より之れを考察するも宗教と迷信との別は能く容易に判知し得可きものにして、その間には一を稱して迷信と云ひ他を以て迷信に非る宗教なりと稱するの理由ありて存在せざる可からざる所以を豫知し得可きなり、蓋し余を以て之れを見るに今迷信と宗教とは其間幾何の差異を知らんとするに、彼の發達高等なる宗教と天理教蓮門教

來 將 の 教 宗

の如き迷信の極はめて甚しき宗教との間には、一見して能く容易に識別判知し得るの懸隔差異ありて存するを知ると雖、又迷信と真正の宗教とはその間極はめて密接なる關係を有するものにして此に至りては唯之れを信ずる人の智識の程度如何に由りて或は真正の宗教ともなり或は迷信ともなるものとす、是れ恰も動物植物の兩者がその發達高等なるものに在りてこそ何人も能く動物と植物とを區別し得可く馬と松とは何人もその一は動物にして他は植物なるとを一見して斷定し得可けれ、而かも植物の最下等の菌類と動物の最下等のアメーバの如きものに至りては此兩者

宗 教 の 將 來

は果して動物に屬せしむ可きものなるか將た又植物に屬せしむ可きものなるか熟達せる植物學者と雖時に判斷し能はざると一般、今迷信と宗教との關係の如き亦實に之れに類し、極端なる迷信と高等なる宗教とを取りて之れを比較せば一見して迷信は宗教と異なり宗教は迷信に同じからざるを知るに苦まずと雖、左程極端ならざる迷信と現今世に宗教と稱せらるるものとを取りて之れを比較對照し來たるときは吾人殆んどその區別に困せざるを得ず、例之ば死者に向て經を讀み廻向するが如きも一方より之れを云へば立派に一種の宗教的儀式にして又他方より之れを謂へば

宗 教 の 將 來

迷信とも名け得可きなり、何んとなれば死者に對して僧を請じ經を誦せしむるが如きは報本反始の禮にして、之れに由りて死者生前の功績を懷ひ死に事ふる生に事ふるが如くすとの意味なりとせばそは決して迷信に非ずして立派なる宗教なりと稱し得可きも、之れに反して僧侶の誦經は死者をして蘇生せしめんが爲めなりと觀じ或は死者の靈をして地獄に墜ちざらしめんが爲めなりと思ふが如きは明かに迷信なりと謂はざる可からず、然れば宗教と迷信との區別は縱令或儀式を行ふにしてもその儀式に對する吾人の考へ方如何んに由りて異なるものにして吾人の之れに附す

宗 教 の 將 來

る意味如何んによりて或は迷信ともなり或は立派なる宗教とも成り得可きものとす然れば今此理を推して之れを考ふれば同一事物にて之れを實行する人の智識如何に由りてその旨趣を異にせるものにして彼の天理教蓮門教の如き智識發達せる吾人の眼を以て之れを見るが故に迷信たるものにして若し眞に天理教蓮門教に由りて心底安心立命しをるの信者に在りては決して迷信ならざるものとす然れば迷信と宗教との區別は唯そを信奉する人の智識程度の如何に由りて變化するものにて或智識程度に於てその事柄を吾人精神の全幅を擧げて満足して信奉しをる間は

宗 教 の 將 來

決して迷信に非ずそは之れを宗教と稱す可く之れに反して最早その宗教上の事柄を眞面目に信仰し得ざるに至るも尙そを習慣の勢力にて全く捨て去るに忍びずして半信半疑の中に之れに盲從瞽動しつあるときばそを目して迷信と稱するなり例之ば天堂地獄の思想の如きも昔の人ばそを眞面目に満足して信仰しをりて之れに由りて彼れ等の一舉一動は律せられつゝありしなり然れば斯かる時代に在りては天堂地獄の説も立派に迷信ならざる宗教なりしなり然るに人智の進歩せる今日に在りては何人も斯かる天堂や地獄の如き説を眞面目に信仰しをるもの無かる可し此

に至りて最早や天堂地獄説は到底吾人の宗教たる能はずして一種の迷信と化し去りたるものとす、然れば迷信と眞正の宗教とは絶對的には何等の區別をも有しざるものに非ずして唯之れを信奉する吾人の智識程度の差異に由りて或は迷信ともなり或は眞正の宗教とも成るものにして、從て宗教には絶對的に眞偽あるものに非ず、從來宗教を以て眞偽に分ち基督教のみ獨り眞宗教にして他は皆な偽宗教なりと爲せるが如きは實に基督教徒の僻見に出でしものたるや明なり、是れ有名なる獨乙の碩學レツシングが早く既に如何なる宗教と雖絶對的に何等の價值無きものは一も是

れあると無く各宗教は夫れ相應に比較的の價值を有しざるものなりと謂ひし所以なりとす。

第三節 宗教は健全なる同一人性の必然に出づ

世界各國如何なる人類と雖苟も人類たる以上は其思想を交換する所の言語を有せざるもの無きが如く、人類は又皆な宗教を有せざるもの一も是れあると無し、日清歐米の開化せる諸國民は勿論皆な佛基兩教の如き高等なる宗教を有しざるや人の能く知る所なるが、その他亞非利加に南洋に南北亞米利加の蠻地に臺灣に北海道にその人種は皆な等しく一宗教を有しざる

ものにしし現今世界に存在しをる人類中宗教を有し
 たらざるものは一も是れ無しとは社會學者人類學者
 宗教學者の等しく一致する所なりとす是れと同時に
 古代民族の歴史を取りて之れを考ふるにセム民族に
 まれアールヤ民族にまれ皆な一種の宗教を具有しを
 るものにして、希伯來人のヤーベ神を崇拜しカナ
 ン人のバール神を崇拜しアツシリヤ人のアツスル神
 を崇拜し希臘人のツオイス神を崇拜し印度のアール
 ヤ人がインドラ、ヴルナ等の諸神を崇拜し支那人の祖
 先鬼神を崇拜しをりしが如き皆な明かに彼等の間に
 一種の宗教ありて行はれをりしと證明せるものにし

て、尙歴史以前に遡りて原始民族中に行はれをりし宗
 教を探らんとすればその宗教的遺物や實に累々とし
 て古墳岩層の中より發掘せらるゝを見る、實に宗教の
 起元や遼遠、茫漠として殆んどその初めを推察し難き
 ものあり、恐く人生と共に存し人生と共に初まりしも
 のならんと考へらるゝなり、斯かる普通的現象たる宗
 教は之れを目して以て同一の人性必然の健然なる本
 性に基因するものなりと稱せずして將た之れを何に
 とか謂はん、蓋し宗教は言語と同く人類固有の一特性
 にして吾人々類が人類たるの精神作用を有して宇宙
 萬有の裏に生息しをるが故に此に初めて生起し來る

所の現象にして、實に人類特有の物産なりとす、然れば彼の牛馬犬猿の如きは吾人と同一環象の下に生息し、とるも吾人と同一の精神作用を具備しとらざるが故に遂に吾人の有する如き宗教なるものゝ現象は彼等動物の社會には得て存在しとらざるなり、果して然らば彼の宗教なるものは吾人々類が斯かる精神作用を有して斯かる環象の下に生息する限りに於て初めて生成し來たる所の現象にして、人類より一段下等なる動物の社會に在りては尙未是れを有る得ずして而かも人類一般に通じをれる一大現象なりとす、是れ余の宗教は健全なる人性普通の現象にして苟も人性の智

情意の精神作用を有し斯かる外部の刺激觸發に應動するが如き構造作用を具有しとる以上は洋の東西を問はず人種の黄白を論ぜず同一人性の必然より生成し來たる所の現象なりと説く所以なりとす。

第四節 宗教は人事的現象なり

既に宗教にして同一人性の必然に基因しとるものとせば、宗教なるものは決して神佛に由りて吾人に附與せられたる天降地湧の産物たるに非ずして、人事界に生起せる自然の現象なり人事的現象なり決して超自然的超人間的現象に非るなり、何となれば宗教は下等動物にも非ず去りとして又神佛にも非る吾人々類が智

宗 教 の 將 來

情意の如き斯かる精神作用を具有しをりて而かも斯かる外界環象の裏に生息しをるの結果爰に初めて生起し來たる所の事實にして恰も言語が吾人々類の間に遍ぬく行はれをると一般而かも言語が神佛に由りて吾人々類に附與せられたりとは何人も思惟せざるが如く宗教も亦實に吾人々類の本性の自然に然らしめたるの結果的産物なりとす然れば宗教をのみ獨りその神聖を保たしめんが爲めに神佛の天賚なりと説くが如きは現今の心理學上宗教學上到底許容し得可からざる獨斷論なりと謂はざる可からず斯かる獨斷論は余の見る所を以てすれば却て宗教の神聖を害す

るものと謂はざる可からず何んとなれば苟も宗教にしてその存在さへも確定されざる神佛そのものゝ賜賚なりと説くが如きは之れに由りて延いて宗教そのものゝ存在さへも五里霧中に葬り去るに等しきを以てなり是れ余の宗教を以て確固たる健全なる吾人々性の同一必然に基因しをるの事實なりと説く所以なりとす。

第五節 宗教も亦進化するの性質を有す

既に宗教にして健全なる同一人性の必然に基因しをる人文史上の一現象に外ならずして決して從來の宗教家が妄想しをりしが如く天降地湧の神賚に非ざ

宗 教 の 將 來

宗 教 の 將 來

る以上は、一切他の人文の諸現象と等しく宗教も亦發達進化するものならざる可からず、然れば基督の二千年前に説きし所の宗教と今日の基督教とはその異同番に天淵霄壤ならざるを見る、又二千有餘年の昔時に釋迦の説きし佛教と支那日本に後來發達し來たりたる佛教とはその發達進化の相異は實に又識者を待ちて後ち知らざるなり、果して然らば宗教も亦人文史上の一大現象にして一切他の人文諸現象と等しく發達進化しつゝゆくものたるを知る可きなり、尙更らに他の例を取りて之れを言はんか、古代希臘印度等に行はれ居たるホメーロス、ヘーシオードス等の天地開闢論

宗 教 の 將 來

や神統記に見ゆる神話宗教と、現今歐洲に行はれざる所の基督教とはその發達進歩の程度果たして如何ん彼の古代印度のアールヤ人種が天地自然を謳歌し居る吠陀の神話宗教とその後代に表はれ來たりたる佛教との發達進化の差異果たして幾何ぞ、其他希伯來人が同一ヤーエーに對する信仰も彼等が茫茫たる沙漠に遊牧の生涯を送りつゝありしの當時と、サロモヤボツデの如き有力なる聖主明が希伯來人を統一しをりし時代と、バビロンニヤ追放前後に於ける各豫言者の時代とに於けるヤーエーに對する希伯來人の信仰とは如何に相徑庭異同しをりしか、如何に前代に在り

てはヤーエーは自然現象崇拜の痕跡を印し或はその
ヤーエーの怒愛樂の不測なる如何に專政君主の如く
なりしに反して各豫言者の當時に至ればヤーエーは
純然たる倫理道德上正義の保護神と化し去りしに非
ずや、是れ明かに希伯來人の宗教的意識の發達進化に
非ずして何ぞ果たして然らば宗教にして苟も人文史
上に於ける一現象たる以上は他の人文諸象と等しく
その性質や又發達進化を容る可きものにして決して
宗教のみ獨り基督の二千年以前も佛の二千有餘年の
昔も何等の變化異同無きものに非ずして、宗教は日に
月に長足の進歩を以て不斷發達し開展しつゝあるもの

のたるや之れを歴史に徴して明瞭疑ふ可からざるの
事實なりとす、是れ余の宗教も又進化す可きものなり
と説く所以なり。

第四章 科學哲學と宗教との異同

第一節 常識と科學との區別

常識と云ひ科學と云ひ共に吾人々類の智を指すものにして別に科學と云ふも一種飛び離れたる不可思議なる人智以上の智識を指して云ふものに非ずそは依然として吾人々類の智識たるに外かならざるなり、故に此點より云へば科學と云ふも常識即ち吾人々類の普通の智識と同く依然吾人々類の智識たるの範圍を脱せざるものとす、然れど又一方より之れを云へば科學は常識と大に異なる所ありて存するを見る、是れ元來科學若くは常識てふ語の由りて起こる原因にして、

若し全然異同無き兩智識にして存在せんか別に科學若くは常識なる語の由りて起こり來たる可き理由無ければなり、然れば科學と常識との異なる所は如何んと云ふに科學は常識に比して一層確實なる智識なること是れなり、例之ば科學に在りては物體が引力のみに由りて墜落するときば、一秒時間二九、八メートルの速度にして落下する者なりとの事實を確實精密に測知しとると雖、常識に在りては斯かる確實精密の智識あること無く唯漠然高所の物體はその支へを失ふとは低所に就いて落下するものなりとの事實を知りてに過ぎざるなり、然れば科學的智識と常識との異同

は、元來科學も常識もその元を云へば人類の智識に外かならずして人智以上に寸歩も超出する能はざるものなりと雖、唯科學は常識に比して一層綿密正確になりざるの智識なりと稱し得可きなり。

第二節 科學研究の二方法

既に科學は常識の綿密を致せるものたる以上は、如何にせば常識をして此綿密を致さしむるを得るやと謂ふに科學者は科學的智識の綿密を致さしめんが爲めに實驗觀察の二方法を應用するものなりと云へり、例之ば科學者は或は一定の測定器械を用ゐる或は藥品を投じ或は顯微鏡を使用して同一事物を研究するにも

來 將 の 教 宗

來 將 の 教 宗

種々の方面より實驗に照らして考覈闡明するが故にその智識は自ら綿密を致すを得るなり、又科學者は斯かる實驗の外に或は望遠鏡を取りて天體を觀察し富士山上の觀象臺に氣象の變化を觀察し常質岩石の表現せる有様を觀察してその智識を綿密正確になすものなり、然れば科學者の科學的智識の精密を得る所以のものは一に實驗觀察の二方法に由るが故なり、是れ實に科學的智識をして常識と異なりて綿密正確ならしむるを得る所以なりとす。

第三節 科學とは如何なる智識なる乎

既に科學は常識の基礎に立ちて而かも全然常識と同

宗 教 の 將 來

一ならず常識に比すれば一層綿密なる智識なることを論明せり、實驗觀察所謂科學的二方法を應用して得たる智識なることを知れり、果して然らば科學とは尙精密に之れを謂へば如何なる智識を指して謂ふものなるか、是れ吾人の此に述べんと欲する所のものとす。既に一言せるが如く科學は綿密確實なる智識ならざる可からざるや明かなれども、又此外に科學は成る可く多くの事實を網羅してその事實の經驗に訴へて得來たりたる所の智識ならざる可からず、換言すれば科學は成る可く多くの事實を包含しざるの智識ならざる可からず、然れど斯く科學は何か此等諸事實を廣

宗 教 の 將 來

く多く網羅したればとて單にその無暗矢鱈に積集しおくはきだめ主義に止らば則ち不可なり、是れ實に一個の好事家の閑事業たるに止るなり、科學は實に此等の事實を一定の順序次第に従て組織を立て、統一し一定の系統を立てたるものならざる可からず、換言すれば科學は系統ある智識ならざる可からず、然れば斯くして得たる科學的智識は勿論不合理的に吾人の信を措き難きものたる可らずして、合理的智識ならざる可からざるや勿論なりとす、故に余は科學を定義して左の如く言んとす曰く科學は合理的に精確なる包含的系統的智識なりと。

第四節 科學は若干の假定上に成る

六十六

科學は實驗觀察の二方法を應用して之れを研究しその結果得たる所の智識に外かならざるものなれば、科學は吾人の實驗觀察の智識ならざる可からず、是に至りて科學は吾人の精神作用が斯かる實驗觀察を成し得るものたるを假定し、之れと同時に外界自然等科學の研究する物體對象が又吾人の實驗觀察の上に上り來たり得るものなりとの假定の下に初めてその研究の歩武を進めつゝあるものとす、科學は外界客觀と内界主觀とが能く一致契合して此にその結果吾人の智識を成さしむるを得るものなりとの假定の下にその

研究を初むるものなり、斯くの如く科學は吾人の智識を假定しとると同時にその智識の依りて成れる内外兩界主觀客觀の存在を假定しとるものなり、既に此等の假定上に立てる科學は到底吾人智識の最終に到達したるものと稱すを得ず、何んとなれば此等の假定にして尙更らに一步進みて吾人の解釋し得可からざるものならば則ち止む苟も尙之れを説明解釋し得るの餘地あるものならば此等科學の假定を説明解釋し去るに非ずんば吾人は到底吾人智識の極致に到達したるものと稱するを得ず、是れ余の科學を以て未だ吾人智識の究竟したるものなりと稱し得ずと主張する所

六十七

以なりとす。

第五節 哲學は吾人々類の究竟的智識なり
 科學の假定しをれる吾人の智識及び智識の依りて成
 れる主觀客觀の異同を考覈闡明して科學の基礎に立
 ちて更らに科學以上にその説明の歩武を進めんと擬
 する所のものは哲學なり、然れば哲學は各科學の假定
 に一層深遠なる説明解釋を與へ各科學研究の結果を
 組織統合して經驗以内より推して經驗以上に迄推し
 及ぼし以て實在を思辨思索するに在るなり、然れば哲
 學は科學と異なりて時代々々に於ける吾人々智の究
 竟せるものにして之れより以上には吾人の智識はそ

宗 教 の 將 來

宗 教 の 將 來

の當時に在りては寸毫も進む能はざる所のものとす、
 勿論哲學は各科學研究の結果を待ちて初めてその思
 辨思索を完うし得るものなれば各科學が日進月歩す
 るに伴に哲學も亦年一年進歩しつつあるは疑ふ可か
 らざるの事實なり、然れどその當時に於ける智識とし
 てはその時代智識の至極究竟せるものは是れ哲學なり
 とす、是れ余の哲學は吾人智識の究竟せるものなりと
 説きし所以なり

第六節 哲學を無視せるの科學は空中の樓

閣なり

科學的智識は若干の假定上に成立しをれるの智識な

れば未だ究竟的智識なる能はず従て科學は尙未だ學術研究の終極を爲しとるものに非ずして、その最後の攻究は之れを哲學に譲らざる可からず否な哲學に求めざる可からず、故に哲學無きの科學は宛然空中に浮べるの樓閣の如く何等の根底基礎をも有せざるものなりそは如何にも不安心の仕事と謂はざる可からず例之ば科學は前既に説明せるが如く吾人の智識の必ず成り立ち得ることを假定し従て智識を成すの要素たる主觀客觀を假定しとるものなれば、今哲學にして斯く科學の初めより獨斷的に假定しとれる吾人智識の成立を否定し主觀客觀を全然空想なりと排斥し去

る所の懷疑論や無宇宙論に説定し來らんが科學は根本的に其基礎を失ひ嚮者に科學者自ら常識に比してその確實を誇こり居たる科學そのものも到底成立するを得る能はざるなり、何んとなれば彼の科學の根本的に假定して以て初めてその科學構成に取りかゝりたる基礎たる吾人の智識そのものにして成立せずその智識の本家本元たる主觀客觀にして龜毛の如く空華の如く將た海市の如く吾人の夢想と何等の異なる所なからんが斯かる礎上に説立せられたる科學夫れ自身の大廈も亦一擧して土崩瓦解に歸す可き沙上の轉奂に過ぎざるものなればなり之れに反して若し哲

七十一
 學研究の結果吾人々類の智識の成立す可きとを明かにし、主觀客觀の存在を是定しその確實なる所以を究はむるを得んが、此に初めて科學はその嚮者に自ら假定し居たる基底の確實鞏固なるを致し來たり以てその健全なる基礎を得可きなり、然れば科學の依りて以て成立す可きと成立す可からざるとの科學の死活問題は一に哲學の掌中に懸りて存すと謂はざる可からざるなり、然れば懷疑論や無宇宙論に非る健全なる哲學々説は科學に取りては至大有力なる後援にして此後援あるが爲めに科學は初めてその成立を見るに至るものとす、故に曰く哲學に待たざるの科學は空中の樓閣なりと。

第七節 科學を顧みざるの哲學は空想なり

然れど同時に科學の經驗的智識を以てその資料に供しとらざるの哲學は空想なりとす、何んとなれば斯かる哲學は單に個人々々の腦中に書き出だしたるの妄想に過ぎずして客觀的に何等の價值も是れ無きものなればなり、彼のヘーゲル哲學が自然科学研究の旺盛と共にその聲價を落としたるも亦實にヘーゲルが一切の實驗を蔑視して思辨的に哲學體系を構成したるの結果ならざる可からず、蓋し哲學は嚮者にも既に云へるが如く實在の思辨想索に在りて存し而その所謂

宗 教 の 將 來

實在なるものは吾人の經驗以上に超出しざるものなりと雖その實在の如何んを想見するは其實在の依りて吾人に發露表現せる各種の現象即ち經驗的智識に求めざる可からず、今一つの例を取りて之れを云はんか哲學の範圍たる實在は九重の雲深き宮廷にして現象界に關する科學の經驗的智識は時々發布せらるゝ政府の命令布告なり、今草莽吾人臣民に在りては九重の雲深き宮廷は到底窺ひ知り得可き所に非ずと雖その宮廷の御模様を遙に想見し奉るは時々政府の發する命令布告等の現象界に表はるゝ者に由りてするの外は無く、政府の命令布告の經驗的智識を外にしては

宗 教 の 將 來

吾人實に九重の雲深きを洩れ窺ひ知る能はざるものなり、今科學哲學の智識又實に之れに類す、哲學の對象たる實在の智識を得んとするには經驗的科學の智識を外にしては到底その能く達し得る所に非ず、故に古代より經驗を疎外視したる哲學の辛苦して漸く之れを建設したるの曉に於て忽ち事實の説明に扞格齟齬を生じ來たり哲學としての効能無きに歸して止む所以又實に此に存す、是れカントが經驗を無視したるプラトーン哲學を評してプラトーンの哲學は經驗以上の雲漢遙にその思辨の羽翼を伸ばし、や真に壯快なりと雖その經驗の空氣に缺如せる遂に哲學自身もそ

の支撐を失して却て墜落するの失體を現はすに至れりと冷笑せし所以なりとす、故に余曰く科學に待つ無き哲學は空想なりと。

第八節 哲學は吾人に最終の安心立命を與ふるの證信なり

哲學に至りて吾人の智識を極はまれり、人智は此に至りてその究竟に到達したるものなり、之れより以上は一步も進む能はざる最後の智識は實に哲學なりとす、此に至りては吾人は吾人の哲學を以て最後の究竟的安心立命を沾ふの唯一智識なりと謂はざる可からず、何んとなれば哲學は吾人々智の至極せる究竟の果地

宗 教 の 將 來

宗 教 の 將 來

にして之れより以上は如何に之れを努むるも吾人實に又一步も進むること能はざるものなれば此に至りて吾人は此究竟的智識を以てその心を安し命を立てずんば將た又何れの所にか安心立命し得可き、然れば此に至りて吾人の哲學的智識は一種の宗教的信仰となり果てたるものなり、そは一方より之れを云へば究竟的智識たれども又一方より之れを云へば至極の證信たるに至りたるものとす、尙他語以て之れを言へば哲學的意識は則宗教的意識たるに至りたるものと謂ふ可きなり、故に余の見る所を以てすれば哲學者なる者は皆な縱令彼等が佛教基督教の如き成立宗教を

宗 教 の 將 來

信じをらざるにも主觀的には一種の宗教信者なりと稱する所以なりとす、何んとなれば彼等の智識的研究の結果到達したる最後の智識は則ち哲學にして若し人あり斯かる究竟地に到達したる智識を尙我れば之れを信ぜずと謂はんか人誰れか其狂愚を笑ざらん、然れば斯かる哲學上に得たる究竟的證信は又之れを以て一種の宗教なりと謂ふも何等の不都合ありて存するを見ざるのみならず却て正當なる者なればなり、請ふ更らに吾人は節を改めて尙少しく本論旨を明瞭ならしめんが爲めに論辯する所あらん。

第九節 哲學と宗教との異同は那邊に在る

手

宗 教 の 將 來

此に於てか客忽ち一難を起して曰く宗教は神と人との關係を説くものなり先生の謂ふ所の哲學的證信の如きは神人の關係夫れ果して那邊にか在る、然らば先生の所謂哲學的證信なるものは如何にして之れを宗教信仰と稱し得可き乎と、曰く然り豈に夫れ然らんや客の所謂宗教を以て神人の關係と爲せるものは彼の泰西人の基督教のみを以て宗教と見做し基督教が神人の關係上に成立しざるを以て又宗教とは神人の關係にして神人の關係を外かにしては他に宗教なるものあると無しと速斷せし誤解を襲踏せしものにして、

斯くの如きは比較宗教學の智識開らけ來たりて廣く諸種民族の宗教を比較研究するに至りしより神人の關係を説かざるものも又等しく宗教なりと稱す可きもの夥多表はれ來たるに至りし事實を忘却せしに由るものなり、若し果して神人の關係を説くものに非ずんば之れを宗教なりと稱し得ずとせば釋迦の佛教の如き無神論は至大なる非宗教と化し去るに至らん豈に斯くの如きの無理あらんや、果たして然らば哲學的證信なるもの、縱令神人の關係を説かざるも究竟的證信最後の安心立命としては又立派に之れを一宗教的信仰なりと稱し得可きものとす、見よ彼の釋迦が

菩提樹下に端坐して哲理的思索の結果靜思覃念廓然と大悟せられたる究竟的證信は豈に之れを一大宗教的信仰と謂はずして將た何んとか謂はんや、然れば余を以て之れを見れば神人の關係を説くは或は之れを淨土教基督教の如き他力教の特徴として數へ擧ぐるは敢て不可なしと雖も之れを以て一般に宗教を律せんとするが如きは未淺見の譏を免れざる者とす、此に於てか客又言を繼いで曰く果して先生の説の如く學者の哲學思想は則ちその宗教的信仰にして宗教即哲學たらば哲學と宗教との異同は那邊に在りや、若し又その異同無しとせば哲學若くは宗教なる名稱は何ん

宗 教 の 將 來

の必要よりして生じ來たりたるか換言すれば同一物に二様の名稱を附するの必要如何んと、嗚呼是れ實に當さに生起し來たらざる可からざる問題なり、然れど今余を以て之れを見るに哲學にしてその究竟的證信たるものは皆な一種の宗教的信仰なり、然れど宗教的信仰の一切は必しも哲學の如き嚴密なる科學研究の分業的研鑽の上に築づかれたるものに非ざるも尙以て宗教的信仰と稱し得可きものにして宗教的信仰は必しも哲學の要求するが如き研究方法を経ざるも尙之れを以て自家安心立命の具に供するに差し支へさへ無からんは立派に宗教的信仰たるの役前は之れを

宗 教 の 將 來

成果しをりたるものと謂ふ可きなり、換言すれば哲學者が永き研究の迂路を辿りて漸く達したるの結果を宗教家が以心傳心に直覺しその究竟の安心立命の果地に到達したりとせよ斯くの如きはその人自身に向てはその立派に宗教的信仰たるの役前を爲しをるものとす、然れば宗教的信仰と哲學的意識との區別は共にその發達したる今日に於て一應その區別を云へばその至極せる思想即究竟的證信の内容如何んに由るものに非ずして、之れに到達するの途ち行き方法の差異に在りて存するものとす、ヘーケルの語を藉りて之れを云へば宗教と哲學との異同はその内容に非ずし

宗 教 の 將 來

て形式に在りて存するものとす、例之ば釋迦の如き或は仙人訪問に或は靜坐思惟に勤苦六年哲學思辨を練りに練りたる曉に到達したるものも、一種の宗教的信仰にして、基督の如く直覺的に神を觀じたるものも又一種の宗教的信仰なり、唯その自己の思想が宗教的信仰となるとならざるとはそが吾人の究竟的證信たるを得ると得ざるとの一點に在りて存するものとす、然れど斯く哲學宗教の別は之れに到達する方法の難易如何んに在りて存すと云ふと雖、是れ單に大體上の概別に過ずして今日より漸次歴史を遡行し印度希臘の古昔に至れば哲學と宗教とは益々密接近邇し來りて

宗 教 の 將 來

哲學にしてその方法の比較的容易にして秘的直觀に訴ふるものあり、宗教の頗る哲學思辨に基くものありてその方法の上より云ふも到底此兩者を區別し得ざるに至たるものありて存するを忘る可からず、然れば主觀的に之れを云へば哲學的意識と宗教的信仰との兩者は到底その間に截然たる區別ありて存するものに非ずと知る可し、然れど若し又客觀にその觀察面を異にして考へんか、哲學者と宗教家とはその人の實驗的活動の多少に由りても又一應は之れを區別し得べきものとす、例之ばアリストテレス、カントの如きは、大哲學者は則ち大哲學者なりと雖未だ二氏を大宗教

宗 教 の 將 來

家なりと稱せざる所以のものは此等二氏の思想が究竟的證信に到達しをらざるの故にも非ずその研究方法の正確を缺けるが故にも非ずして、唯彼等二氏が實際的衆生濟渡の大活動を社會に實現すると釋迦や基督の如くなると無くして、單にその書齋中に引き籠りて自家の哲學思想を以て唯己れ一人のみ安心立命しをるのみなりしが故にその自家の證信に由りて安心立命するの點は彼等二氏も等しく宗教的なりと雖未彼等が自己の主義を根本義として實際的に等く迷羊を惑むの大活劇を社會に實現すると釋迦基督の如くならざりしに由るものとす、然れば宗教家と哲學者と

宗 教 の 將 來

の異同はその實際的活動の多少有無に由りて區別せらる可きものにしてその思想如何んに由りて區別せられ得可きものに非ざるなり、然れど人あり若し彼の山中に獨棲して特り自ら清うする仙人の如きものを引き出し來たりて彼れ等は宗教家なるか哲學者なるかと問はゞ余實に將きに左の如く答へんとす、曰く彼等は宗教家にして宗教家に非ず哲學者にして哲學者に非ず則ち彼等は哲學者宗教家の中間に位しをるものにして恰も動植二界の分界に在るものが未だ動物とも植物とも判然名け得可からざるが如きなりと、然れど之れを要するに哲學者と宗教家とはその到達せ

宗 教 の 將 來

し思想の内容上に於ては寸毫の異同無しと雖その研究的
方法上に差異あり、又その實際的活動の有無とに
由りて一應は區別し得可きなり、然れど余は將來の宗
教も必その到達の方法は哲學的たるを要せずと謂ふ
ものに非ずして過去の宗教の多くは斯くありしと謂
ふに止るもの、否な余は寧ろ將來の宗教なるものは少
くともその開祖たるの人に於てはその研究の方法に
於ても必ずや當さに哲學的ならざる可からずと主張
せんと欲するものなり、

第十節 哲學は吾人に安心立命を與ふるの
證信としては智情意全作用を以て

構成す

宗 教 の 將 來

哲學は前既に論明せるが如く吾人の究竟的證信なり
終極の安心立命なるが故にその成るや必ず吾人の智
情意全作用の平衡上に成るを要し智や情や意の三者
中その一にのみ偏依す可き者に非ざるや明なり、何ん
となれば此三者中その一に偏依して成れる哲學は必
ずや吾人の智を満足せしむれば情に於て不満を訴ふ
るあり情を満足せしむれば意に於て嫌らざる所あり
て兎角扞格矛盾する所あるを免れず従て吾人の安心
立命を得しむる能はざるものなればその哲學や必ず
又吾人の智情意全作用より成るを要する者たるや明

かなればなり、蓋し安心立命とは何ぞや吾人全精神の
 安慰にして智情意全體の平衡調和の状態より得たる
 ものに外かならざればなり、是れ吾人の哲學は究竟的
 證信としては吾人の智情全體より成るを要すと説く
 所以にして従て宗教も亦吾人の究竟的證信としては
 智情意全作用より成るを要し、彼の感情一方にのみ奔
 逸し去れる宗教が今日現に吾人の精神を満足せしめ
 得ざる所以なり、彼の宗教は獨り感情なりなどと主張
 して宗教の姑息的辯護を圖るの論者須く思はざる可
 からざるなり。

第十一節 常識及び科學哲學と宗教との關

係

常識や科學や哲學及び宗教や畢竟是れ吾人々類の智
 識にしてその異なる所は單にその程度の差のみを外
 かならずとせば、若し人あり此に常識にて得たる智識
 のみにて安心立命するに足るの信仰に到底しをるも
 のなりと謂はば、斯かる人にはその常識の信念や直ち
 に又その宗教を形成しをるものとす、彼の愚夫愚婦等
 の蓮門教や天理教の教ゆる所を信じ眞面目にそれに
 歸依し彼れの究竟的安心立命となしをるが如き皆此
 階段に住しをるものとす、之れに反して常識より更ら
 に一步を進めて經驗科學の規定せる智識のみを以て

宗 教 の 將 來

満足しそが如何に獨斷的假定の上に立ちをるにも關はず更らに一步進みてを説明解釋するを無くして能く容易に爰に安住してその科學的智識のみを以て満足し安心立命し之を以て究竟的證信となし得る人に在りては斯かる科學的智識は又その人に取りて立派に宗教たるの役前を成し遂げつゝあるものとす、然るに到底科學的智識を以てしても尙満足せずして更らに深く一步その上に進めて之れに由りて得たる智識を以て初めて満足し安心立命せんとするの人に在りては實に哲學的智識を要するものにして而てその智識や人智の眞に究竟せる所のもの之れより以上

宗 教 の 將 來

は一步も吾人々類の履み込む能はざる所のものとす、然れば如何に智識の至極を求むる人に在りても哲學的智識以上には何等の究竟せる一層深遠なる智識なるものあるを無きものなり、然れば余を以て之れを見れば將來學問發達の結果吾人の安心立命に資するに足るの證信にして即ち吾人の宗教的信仰となり得るものは一に此哲學的智識たらざる可からざるものなりと斷言するを憚らざるものとす。

第十二節 以上の立脚地より觀察したる從

來の諸宗教

既に將來に吾人の希望せる健全なる吾人精神の全幅

を満足せしめ得可き宗教は一に健全なる科學の基礎に立てる哲學的證信ならざる可からずとせば、從來の諸宗教中果して能く以上吾人の精神的需要を満足さずるに足るものある乎、佛教と謂ひ基督教と謂ひ本世紀に至りて著しく進歩發達したる智識經驗に照らしては到底充分なる吾人精神の全幅を満足せしめ得るの希望は到底是れ無きや、早に公平なる識者の是認しをれる所なりとす、然れど從來身を基督教若くは佛教の流派中に入れざる者に在りては感情上弊履を棄て去るが如く、佛教基督教を棄て去るに忍びざるものあり、又社會上より之れを謂ふも既に佛基兩教は或は東

亞に或は歐米に社會人心の多數上の勢力と爲りたる者なるを以て、今一朝にして舊來の宗教を顛覆し去る時は社會民心上に至大なる激變を醸成し來り意外なる困難に遭遇するものあるを免れざるを以て、此に於て或は從來の宗教の改革と稱へ或は宗派建立と稱へて以て在來の宗教を改造革新して社會の新需要に應ぜんとするの必要ありて生じ來るを見る、此に於て宗教改革は起り媒介神學者は生ぜり、而てその結果在來宗教の舊衣裳の下に新思想を藏くし古瓶に新酒を盛りてその名のみ在來の舊名を襲用しをりてその實を變改刷新せんとするが故に恰も竹に木を接ぎ狐

九十六
に馬を載せたる如き珍奇なる殆んど滑稽に類せる宗教論を醞釀し來り此に教學の破綻衝突を見るに至るものなり、請ふ余は更らに此教學の衝突に就いて一言する所あらんとす。

第五章 宗教と科學哲學との衝突は那邊に原因する乎

第一節 現今の社會に於ける人智の懸隔

現今社會の實際的生活上に於ては貧富の懸隔則ち貧者と富者との間に横はれる一大鴻溝は本世紀に至りて益々その甚しきを加へ來ると同時に理論的生涯に於ては知識の懸隔は上下兩層の社會に於て益々その大なるを致すに至れり、此に於てか一方に於ては高遠なる哲學思想に由りて安心立命するの哲學者あれば狐狸妖怪を信じて安心立命しをるの愚夫愚婦ありとす、然るに宗教なるものは一般に智者學者を相手とせ

九十八

ずして愚者不肖者を對機と爲すが故に此に宗教と學術との衝突撞着は勢ひ起こり來たらざる可からず、則ち智者學者の如き智識の進歩しとる所のものより見れば天理教や蓮門教の如き妖教邪祠は勿論彼の愚夫愚婦が奉じて以て自己の安心立命の具に供しとる所の佛教基督教の如きものも又たその幾多の迷信ありてその中に存在しとるを認めずんばあらざるものとす、此に於ては在來の宗教にしてその説く所教ゆる所一に吾人現今の發達せる智識道德と幾多の不調和幾多の衝突を致し來たらざる可からざるに至れり、此に至りては哲學科學は共に宗教がその自己の所見と撞

着衝突する所の者にして非眞理と認めらるゝ者は遠慮會釋無く悉く之れを破壊し去りて健全なる智識信仰の樹立に努むるが故に、在來の宗教を習慣的に墨守し敢て在來の宗教に對してその不満を感じをらぬ所の人々は直ちに斯かる科學者哲學者を目して以て宗教を讒誣し、宗教を誹謗し、宗教を荼毒するものなりと爲し以て痛く之れを迫害するに至るものとす、是れ實に科學哲學と宗教との衝突する所以にして特に本世紀に於ける科學哲學の進歩は頗る驚く可きものあり、此科學哲學の批評的試験石に懸けては在來の宗教は何ぞ能くその缺點無からんや、如何に完全なる宗教と

百
 雖余の嚮者に既に論明しをけるが如く頑迷なる一部
 宗教家の信仰しをるが如く人智以上なる神佛の智識
 に非ずして依然人類の智識にして宗教亦人文史上の
 一現象たる以上は、人文の發達開展せる今日に在ては
 最早人文進歩の尙今日の如き盛況を呈しをらざりし
 昔日に起こりたる宗教そのもの、缺點あると現はれ、
 従て斯かる宗教はその儘にては最早や進歩せる吾人
 の精神を満足せしめ能はざるは固より其所なりとす、
 而かも尙一方に於ては人智の進歩尙幼稚なる人民間
 に在りては在來の宗教は依然その信仰を持續しをり
 て僧侶亦一向之れを維持せんと欲して百方詭計詐謀

を回らしつゝあり、従て彼れ等の詭計詐謀の結果は纒
 令下層社會の愚夫愚婦を瞞過し去りて多少その嗜好
 に投じ得るも其結果は之れを智識進歩せる智者學者
 の眼光よりするときは甚しき不倫不徳の行事多く迷
 信の結果は或は腐敗せる御水を病人に服せしめて醫
 藥を禁止し或は加持祈禱に由りて疾病を醫癒すと稱
 して衛生上より之れを云ふも甚しき害毒を社會に流
 布しつゝあるに至るものとす、此に於てか教學の衝突
 逾々劇甚を極はめ來たり智者學者は單に智識上より
 のみならず社會上道德上よりも斯かる迷信的宗教の
 破斥に盡瘁し、頑迷固陋なる僧侶は愚夫愚婦を煽動し

て之等の攻撃に當らんと擬す、是れ實に現今に於て科學哲學と宗教との衝突撞着するの眞想にして、其原因や一に現世紀に於て人文の進歩は上下兩層の人民間に至大なる智識の懸隔を生ぜしめたる結果に在りて存するものと謂はざる可からざるものとす。

第二節 教學の衝突は漫に宗教を神聖化するに由る

佛教若くは基督教の如き一大宗教がその教祖の人格的感化に由りてその教礎を堅むるや、之れに繼いで起り來る所の思想はその遺弟等が漫にその教祖の人格に歸托信賴するの極、教祖の一身を神視し聖化する

宗 教 の 將 來

と是れなり、則ち教祖の弟子等はその教祖の人格的感化の厚きにその心身を恍惚せしめ滿腔の熱情を以てその師恩に謝するの極、その教祖は啻に尋常一樣の人間と同視すると能はず人間以上の存在者の如く思惟するに至るものなり、既に遺弟はその教祖を見ると人間ならざる超人間的存在者と爲す、故に斯かる超人間的存在者の啻て吾人に垂示せし所の佛教若くは基督教の如き成立宗教は、又寸毫の誤謬無きものなりと思惟し、その宗教を信重するの極、元來宗教が人文發達史上の一現象に過ぎずてふ事實を忘却して、萬古不變千歲不換の眞理を全然該宗教の保有しをるもの、如く

信じ、以て完くその宗教を如何にも神聖なるものに聖化し去るに至れり、此に至りてその宗教に教ゆる所の者は是が非でも眞實なりと固信し、百方その時代の科學哲學の智識に對して防禦的辯護の勞を採らんとするに至るものなり、是れ有名なる中世の神學者テルツリアヌスが不合理なるが故に余は信ずと絶叫して、強いて基督教を辯護し基督教をして泰然として智識の攻撃に對し白眼冷視せしめんと企圖せし所以なりとす、然れど斯くの如くして果して宗教の神聖は保護せられ得るものなるか、宗教の辯護は成遂せられ得るものなるか、斯くの如きは却て反對論者より斯かる辯護

的宗家を目して以て病的なり狂愚の痴人なりと貶黜し去らしめ、その所論に一顧の價值だも附せざるに至らしむるものたるに非るか、宗教は元來斯く超人間的の産物にして神聖犯かす可からざるものなるか、余大に惑ひ無き能はざるなり、余は虚心平氣不偏不黨に宗教を觀察しても亦是れ人心自然の産物にして人文史上の一現象たるを知れるものなり、果たして然らば宗教豈に獨り斯かる超人間的に神聖視するの仕格を有し得可きものならんや、然るに嚮者に宗教が彼の教祖の人格的感化力の絶偉なるその遺弟等に由りて超人間的事實として神聖化られしより、此思想や奕世累葉

的々相承して恰も宗教の本質の如く習慣上無智の信者に由りて偏信固執せらるゝに至り従て一方にてば益々その宗教の既に時世に適せず人文の發達に數段後れを取りとるにも關はず尙以て神聖犯かす可からざるものゝ如くにその在來の體面を昔の有の儘にて維持しゆかんとして此に進歩せる科學哲學は益々宗教の狂態痴狀を嘲罵し去り愈々教學の衝突をして劇甚ならしむるに至るものとす、

第三節 現今歐洲に於ける教學の衝突

近世に至りて歐洲に於ける文藝復興が科學哲學の智識を頗みに増加し來たり従て中世紀基督教の教權に

服従して満足しとる能はざりしより遂に此にルーデルの宗教改革を惹起するに至り以て歐洲人の科學哲學に關する諸智識は交通機關の進歩と共に益々増進し來たり特に在來は歐洲に於ける基督教の外には宗教無く基督教信者に非るものは宗教信者に非ざるものゝ如く思惟しとりし偏見僻解を打破し支那に印度に基督教以外の諸國民中にも亦立派に基督教と相對峙して之に匹敵す可きの諸宗教ありて存するを悟るに至れり之ねと同時に基督教聖典の本文批評や蠻族宗教の比較研究や將た又諸科學進歩の結果や歐洲人の宗教に對する思想をして本世紀末の今日に在り

宗 教 の 將 來

ては至大なる變化影響を蒙らしめ從て斯かる科學的批評的眼光を以て在來の基督教を觀察し來たるときは在來の基督教徒の思惟しをりしが如く、基督教のみ獨り唯一眞理宗教なりとの思想は如何に最負目に基督教を觀察しても到底その能はざる所のものとなれり、進歩せる科學哲學の智識は基督教の舊信仰と到底その一致調和を得る能はずして荐りに煩惱せり、此の秋に於て一方にては寺院的基督教は尙多少無智の人民中に其信仰を習慣的に維持しつゝあり、僧侶等はその餘勢を藉りて迫害的にも暴力を以て科學哲學を壓伏せんとするより、此に於てか科學哲學の兩者は至大

宗 教 の 將 來

なる衝突撞着を惹起するに至りしものとす、此に於てか健全なる科學哲學の智識に富瞻にして進歩的の一大信念を獲得せんと努めつゝあるものは在來の基督教より獨立して旺んにユニテリアンを主張するあり、尙之れにても満足せざるの輩は更らに進みて全然在來の宗教に反對なる内意を以て起こりたる倫理運動に着手するに至れり是れ實に現今歐洲に於ける教學衝突の實況なりとす。

第四節 現今我邦に於ける教學の衝突

歐洲に於ける思想界の有様や夫れ斯くの如し、然るに翻りて今我邦に於ける現今思想界の實況を觀察する

に教學の衝突は尙一層是れより太甚しきものありて存ずるを見る、則ち現今我國に在りては彼の歐米諸國が數百年間に漸を追ひて逐次得來たれる人文の發達を近々半百に充たざる歲月を以て獲得せんとしてつゝあるものなれば、万事不整頓不調和にして何れの方面にも衝突矛盾を來たしつゝあるは人の能く知る所なり、矧んや我邦今日の思想界信念界には佛教あり基督教あり神道あり儒教あり甚しきに至りては天理蓮門の迷信さへ我國人民の宗教心を支配せんとしてつゝあり、我國の宗教が斯かる多種異様なる上に搦てゝ加はへて西洋新來の智識を愛するの人は哲學若くは科學

を以て自家安心の立脚地と爲さんと企つるに至れり、此の如く幾多異要素の尢然たる積集累堆に止まりて何等の組織統一も無き我國の思想界信念界が諸有方面に於て幾多の衝突撞着を致し來たるは眞個に故無きに非ざるもの、之れを彼れ歐米諸國が數百年間を通じて全然基督教の統一に歸しをりしその餘勢として西洋の信念界が比較的單調なるものあるに比較し來たるときは、頗る一種奇異の感無くんば非ざるなり、蓋し我邦に在りては維新の際皇政復古の狂熱は頗る熾んなるものありて存し、その餘勢や既に千有餘歳の歴史的關係を有し我國特有の發達ある佛教を一時に廢

滅し去らんと努め、或は寺領を官没し梵鐘を毀ちて大礫を鑄造し以て外侮に當らんと企て一切僧尼を還俗せしめんとせしより其餘響は延いて明治の今日に及び、佛教は一時排佛毀釋の呼聲の高かりし影響として既に徳川氏三百年來一人の英邁卓識の僧侶ありて出づる無く、我國當時の信界が少くとも中以上士分の信仰を擧げて儒教主義の跋扈に一任し佛教の命脈は單に愚夫愚婦の信仰にのみ持續され佛教は殆んどその無形の領地の大半を儒教に削り取られざるの觀ありて、徳川氏三百年間我國の信界は儒教佛教の二元的傾向を取り此兩者の間に彷徨しつゝありて甚不安定なる位置を取り、而て此間獨り幸にして封建制の劃一は有形に無形に當時に於る一切の事物を束縛しをりしが故に、徳川時代に於ては我邦は著るしく外部に表はれたる信念の動搖を見ざりしと雖、明治維新に至りて封建制の破壊と共に之等の潛勢力は一時に勃發し來たり、加ふるに政府自ら人爲的方法を用ゐて當時の宗教たる佛教撲滅策を講ぜんとする時に當りて、我邦世界の動搖を見る又敢て故無きに非るなり、矧んや我邦在來の宗教以外に基督教と云ひ將た又科學哲學と云ひ幾多の思想信念は滔々として吾人の精神界を攪亂動搖し來るものあり、宜なり現今我邦の思想界信念界

百十二

宗 教 の 將 來

が恰も狂風怒濤に翻弄せらるゝをる孤舟の如く、一浮一沈一上一下何等の寄屬する所も無く何等の歸托する所も無く動搖しつゝあると今日の如くなるを見るに至りたる、斯くの如く我邦の信念界が今日縱令西洋新來の思想無きも尙その多少の動搖を免る能はざる境遇に遭逢しをるに、更に批評的西洋の思想の輸入せらるゝあり、苟も此等の新思想と舊思想新信仰と舊信仰との平衡調和を得ざる限りは、其相互間に衝突破綻を來たす得て知る可きなり、加之明治維新の初め彼の排佛毀釋の呼聲の高かりし時に當りて佛教寺院は俄然その既得權たる幾多政府の保護を失ふに至たり

宗 教 の 將 來

たる寺院は又その子弟の教育養成さへ満足に爲すと能はざる悲運に陥りしより、僧侶は一般社會人文の發達進歩に伴ふ能はずして十九世紀終末の今日尙昔日の斷片的講義や地獄極樂説に高座の上に古風の説教法談を繰返へしをるの有様なれば現今の佛教は愚夫愚婦を相手とするその迷信的皮覆をさへ剥ぎ取らば殘こる所のもの果して幾何ぞ、吾人は現今の佛教とは則ち迷信の謂なりとの斷案を得來たるに躊躇せざるを哀む、噫現今の佛教と天理蓮門の淫祠と果して幾何の相異がある、さなきだに既に業に吾人の精神を満足し得ざりし佛教の今日に至りては益々墮落し去り

て迷信と何等の擇ぶ所も無きに至りては、斯かる宗教を争でか現今の科學哲學の智識と相併べて此兩者を雙信しとるを得んや、嗚呼此に於てか吾人は不幸にも斯かる事狀の下に明治の今日に於ける吾人の心頭に宗教と科學哲學との智識の衝突を喚起し來るの止むを得ざるを目撃するに至りしものとす。

第六章

科學哲學と宗教との衝突は如何にして調和す可き乎

第一節 宗教の超人智主義の謬妄

宗教と科學哲學との衝突漸くその激烈を致し來り學問進歩の結果舊來の宗教は到底吾人の信仰を博する能はざるに至りしより爰に先づ舊來の宗教と進歩せる新智識との調和を計りて在來の宗教を辯護せんとなつる所のものは宗教の神聖主義を主張するの論者なり、此説は特に頑迷なる僧侶輩に多く直接に一宗教とその利害得喪を伴にしとりて強辯的にも其宗教を辯護して一日もその命脈を社會に永からしめんとす

るの論者の多く稱ふる所なり、今彼れ等論者の説く所を聞くに曰く抑々宗教なるものは吾人々類の製作せし所のものに非ずして神佛の天與に出づ然れば宗教や神聖にして犯かす可からず人智を以て窺知すると能はざる神佛の智識に淵源しざるものなり、既に宗教にして人智を以て推測し得可からざる超人間的不可思議的神佛の智識に由來しざるものなりとせば、そが説く所そが教ゆる所は如何に吾人々類の智識と衝突矛盾するものありて存するが如く見るも、之れが爲めに宗教の信念を害するが如きとは毛頭ある可からざるなり、何んとなれば元來宗教は人間以上神佛の智識

にして、既に神佛の智識にして人間以上の智識たるものならば、神佛の智識に由りて與へられたる宗教が如何に神佛の智識以下に位せる吾人々類の智識と衝突すればとて、宗教の宗教たるに於て何にか有らん、却て斯くの如きは偶々以て哲學科學等の人智の有限にして尙至らざる所のものありて存するを反證して餘りあるものに非ずや、果して然らば若し宗教と科學哲學との衝突矛盾にして起こるとあらんか、吾人は宜く斯かる場合には有限なる吾人々智の尙至らざるものあるとを覺悟し、宗教に教ゆる所を以て道理の如何んにか關はらず一心不亂にその眞理として信受奉行せざる

宗 教 の 將 來

可からず、蓋し宗教と科學哲學とは外見にては衝突矛盾するが如く見ゆると有るも、それは實際衝突矛盾するものに非ず、何んとなれば理性的學術と超理性的宗教とが元來衝突矛盾す可き謂はれ無ければなりと、此説たるや一見宗教の辯護てふ點より觀れば如何にも宗教の爲めには便利なるが如く見ゆると雖、少しく深かく考へ來る時は決して然らざるの理を發見するに難からざるものとす、則ち此宗教神聖論は一宗教が科學哲學と衝突矛盾せしときに當りその一宗教を辯護するには至極便利なるものありて存すと雖、斯く云ふときは宗教は全然吾人々類の智識を以て彼れ是れ鬼

宗 教 の 將 來

や角論ずるを得ざるものとなり従て又自宗の長を説きて他宗の人に示めずとも得て爲す能はざるに至るものなり、何んとなれば自宗の長を説明して他宗に優さる所以を指示するは則ち是れ吾人の智識に訴ふるの外道無ければなり、然るに不幸にも論者の説に由れば宗教は吾人の智識以上に位するものにして吾人の人智にて彼れ是れ忖度するを得ざる所の者なれば、その果して眞理なる所以を他に論明するが如きは固より不可能なるものとす、若し又論者の如く宗教を以て全然吾人々類の智識に由りて律し得ざるの範圍に在りて存するものなりとせば、迷信と宗教とは如何にして

宗 教 の 將 來

之れを區別し得可きが、若し吾人は吾人の理性に訴へて確かに迷信なりと認むる所の事も、若し人ありそは迷信に非ずして正信なり真正なる宗教なり然るに汝がそを目して以て迷信と爲す所以のものは汝の理性の謬見に出づ、蓋し宗教の事たる畢竟人智以上に位しざるものにして超人間的超理性的なればなり、然れば我が信奉する宗教は決して迷信に非ざる真正の宗教なり汝の理性に由りて見る所こそ却つて誤りをれるなれと主張せば宗教神聖論者は果して何んの言葉を以て之れを逆へんとする乎、是れ實に宗教の超人智主義を主張する論者のその答辭に窘窮せざるを得ざる

宗 教 の 將 來

の大難點なりとす、若し又之れを認識論上より考へて、縱令論者に一步を譲り宗教を以て人智以上の神智なりとするも論者の主張せる宗教は超人智的なりと論斷し、宗教は神の智識にして人間の智識にあらずと斷定するその論者の智識は果して何ものゝ智識なるか、その智識そのものに至りては畢竟人智の範圍を出づる能はざる可し、然れば論者は論者がその宗教は神與なりと論斷する智識は人智なるも尙ほ是れを充分信憑し、而してその宗教の教理を論ずるに當りてはそは人智なるが故に吾人の理性は神與の宗教を是非するを得ずと稱して人智に絶對的不信任を與へんとす、豈

に自家撞着の甚だしきものならずや斯くの如く如何なる點より考察するも宗教を辯護せんが爲めに宗教の超人間主義を主張するの論者は絶對的に自家撞着の謬妄に陥ありをれるものと謂はざる可からざるなり。

第二節 宗教の科學的研究を忌避するの姑

息的調和論

宗教と學術との衝突を避け宗教をして安全なる位置に歸托せしめんと企つる輩の中に尙更らに説を爲ものあり曰く元來宗教を科學的に研究すると稱して或は聖書の高等批評に或は佛教の歴史的研究に曰く本

文批評曰く自由討究と元來斯くの如く宗教を研究すると稱してその實宗教の短所のみをほちくり出して漸々宗教を惡るきものに落下せしめんとしつゝあるは甚だ不可なり、宗教の本典の如きは讀まず講ぜず唯々有難きものとして有難涙をこぼすに止め、何にものゝをばしますかば又敢て問ふを要せざるなりと、然れど此説の到底今日に取るに足らざる時勢後くれの非科學的獨斷論たるや又敢て余の説くを要せざるものなれども、現今の宗教界に於て實際その勢力を掌握しをれる人士間に此説の尙有力なるものありて存するを想はゞ、余や又此に一言その妄を啓きとくの必要

宗 教 の 將 來

ありて存するを見る、抑々論者は宗教と科學哲學との衝突は宗教の事項を人々が知りてくるより起こるものにして、人々が宗教の本典中には何に物が書いてあるかをさへ知らざるときは宗教と學術との衝突も自然起こり得可き理由無きものなれば、宗教の事は成る可く世間に秘しとくを善しとするものなりと謂へるものにして、則ち信者は之れに由らしむ可く之れを知らしむ可からず底の支那人の所謂黔首を愚にしとくの窮策を應用して以て宗教學術との衝突を避けしめんと企てし所のものにして、此論鋒にて進まば國家は普通教育を熾んにするの必要も無ければ科學哲學の

宗 教 の 將 來

研究を熾んにするの必要も無く、社會をして唯蠢爾として動き漸然として死し飽きては寝ぬ餓へては食ふ太古の野蠻未開の状態にさへ復歸せしめば、宗教の安寧維持には最も都合よき時代を現出するに至らんとす、然れど此くの如き説は之れを以て堯舜三代の昔時に稱へしめば則ち可、苟も二十世紀の世界に此言論を爲す者あらば誰れかその狂愚を笑はざらん、論者の如きは何んで蚊でも所謂臭き者には蓋をしる主義にて、斯くの如く自ら蓋を以て自家の臭きを隠くしむと思ひとるの間に、早く既に東西の交通は頻繁にして學術は全世界の共同財産なり眞理は萬人の共有物にし

百二十八
 て何人も能く任意に之れを究索し得可しとなしとるの今日に當り、彼れ西洋人の機敏なるその彼れ論者が切角骨折りて爲しをれるの蓋を發きその醜を天下に曝露するに至りては論者は果して如何なる態度を取りて之れに當らんとするか、實に此時に當りて後悔臍を噬むも何等の益なきに終はらん、果して然らば吾人東洋人も亦自ら進みて世界の宗教、世界の學術を研究して、東西兩思想の長所短所を比較考察し探長補短彼の粹を抜いて我の足らざるに充て以て益々世界の學術、世界の宗教に貢獻する所ありて、自他共に健全なる安心立命の新立脚地を確立するを期せざる可からず、

是れ豈に真正なる大丈夫本來の快事眞個に學者宗教家終生の眞面目に非ずとせんや、彼の因循姑息なる手段を用ゐて宗教の科學的研究を忌避し自家宗教の缺點を覆ふにのみ努め單に臭き物に蓋をするにのみ努めざるが如きは眞に女々しき所爲と謂はざる可からず、矧んや永く斯かる蓋をしる主義の持續し得可きものに非ざるをや論者以て如何んとなす。

第三節 宗教を感情一方の保護に托するの危険

宗教と科學哲學との衝突を恐れて宗教の避難所の吾人の感情に求むるの學者少からず、有名なる神學者シ

宗 教 の 將 來

ユライエルマツヘル氏の如き是れなり、氏は宗教を以て智識にも非らず意志にも非ずして神に憑依歸托するの感情に在りて存すと説けり、既に宗教にして吾人の感情に在りて存すとせば宗教が如何に吾人の智識と矛盾し、理論の上よりはその存在をさへも到底證明し能はざる神佛をも、尙能く之れを信じ之れを崇拜し得可き者とす故にユライエルマツヘル氏の意に惟へらく宗教は智識に非ずして感情に在りて存するが故に智識を以て宗教を測度せんとするは尙寒暖計を以て物の長短を計らんとするが如く全然その方法目的を謬りたるものなりと、氏は斯く宗教を以て全然吾

宗 教 の 將 來

人の感情に於て存するものと爲し以て宗教を辯護せんと試みし、斯く云ふときは畢竟宗教を以て全然吾人の智性以外に抛擲し去る者なるを以て自家宗教の眞否を説明して他人に説き聞かすとも爲し得ざるととなり一種の秘的感情を有する者の外には宗教の事は到底之れを知り得ざるとなり、畢竟リツチエルヤゼーレン、キールケガールド等の最も不健全なる認識論上に成れる宗教觀に陥るらずんば非ず、故にその極余の既に一言せる宗教神聖論者の如く宗教を以て人智以上の産物と爲しその結果宗教を辯護せんと欲して却て宗教そのもの迄も之れを顛覆し去るに至る

百三十二
 の不結果に陥らざるば止まざるものとす、然れば宗教を以て吾人の感情一方にのみ在りて存すと説きて哲學は智識に基き宗教は感情に成ると爲し之れに由りて以て宗教に最も安全なる基礎を與へたるが如く考へざる所の學者は、西洋にも少なからず、日本にも在來佛教と新智識とを以て成る可く調和せしめんと企圖せらるゝ僧侶輩には儘多く之れを目撃する所のものなりと雖、其實彼等は自家の宗教に意外なる危害を與へつゝあるものなりと謂はざる可からざるものとす。

第四節 健全なる宗教的信仰は吾人の智情

意全作用なり

百三十三
 斯くの如く宗教を以て吾人の感情一方にのみ在りて存すと説く學説は宗教の爲めには頗る危険なる學説にして、却て之れに由りて宗教に幸するものに非ずして、それを災するものたるとは前既に之れを明瞭にせり、果して然らば宗教を以て單に感情一方の寄托にのみ委するの不可なるが如く智性若くは意志の一にのみ附托するの同く偏頗なる見解たるを推知す可きなり、蓋し宗教は吾人の安心立命を以てその要務と爲しをるものなれば恰も哲學が吾人々心の安心立命に資せ

宗 教 の 將 來

んが爲めには必ずやそが智情全作用より成り立をらざる可からざるが如く、宗教も亦必ずや當さに吾人の安心立命の要具としてはその宗教的信仰は又必ず智情意全作用より成りをらざる可からざるものとす、蓋し人心は有機的統一を有しをるものにして學問研究上よりこそ假に智情意の三者に之れを區別こそすれ、吾人の精神作用の有機的關係ある到底能く同一吾人の精神を以て三種の殊態の如く峻別し得可きものに非ず、人心の作用するときは必ずや此三者は協働的に作用する者なり、故に吾人々心にして苟も斯かる三作用の協同活動より成りをるものとせば斯かる精神に

宗 教 の 將 來

安心立命を興へんと欲するを以て任務とせる宗教的信仰そのものも亦必ず吾人の智情意全作用に由りて構成せられたるものならざる可からざるや明かなり、故に健全なる宗教は必ずや又哲學と等しく否な哲學的意識と宗教的意識は共に吾人の智情意全作用より成るを要するもの、從來の學者宗教家が智情意の三者を峻別して考察し單にその一のみにて宗教的信仰を成し得るものゝ如く考へしは至大なる誤謬なりと謂はざる可からざるなり。

第五節 健全なる教學はその二者果して衝突す可きものなる乎

宗 教 の 將 來
斯く宗教も哲學も共にその健全なるものは吾人の心的機能の上よりは吾人々心の全作用より成れるを要し斯くして初めて吾人終極の安心立命を與ふるの仕格を有し得るに至るものなり、果して然らば宗教學術の兩者は到底衝突撞着す可きものに非ずして却て此兩者は一致調和す可きものたるや明かなり、唯今日實際上教學の衝突ありて存するを見る所以のものは或は舊來の宗教その儘を以て人智の進歩せる今日を律せんとし、若くは舊信仰に新衣裳を被らしめて今日の

宗 教 の 將 來
精神界に間に合はしめんと欲するより爰に此間の鈞合到底充分成遂し得ず之れに由りて此に宗教と科學哲學との衝突ありて生起し來るを見るに至るものとす、然れば健全なる宗教と科學哲學則ち健全なる教學の兩者はその性質到底衝突撞着す可きものに非ず却つてその衝突撞着を容れざる所のものなり、矧んや余の見る所を以てすれば將來の宗教は必ずや又健全なる哲學ならざる可からざるを以て、若し哲學にして苟も自家撞着の學説たらざる以上は必ずや當きに教學の二者は共に正しく相容る可きものにして到底衝突撞着す可きものに非ずと謂はざる可からざるなり。

第七章 健全なる信仰の樹立は我邦目

下の最大急務なり

第一節 従來の諸宗教に對する吾人の不満
 東洋たると西洋たるとを問はず本世紀に於ける人智の進歩は實に驚く可きものありて存し之れが爲めに舊來の智識經驗内にて構成組織したる所の信念を以てしては今日に擴大せる吾人の智識經驗を満足せしむる能はず必ずや當さに何等か健全なる時機相應の信念を構成し來たるに非ずんば吾人は到底吾人の全精神を満足せしめ能はざるものとす例令バモーゼの十誡はモーゼの昔時に在りては能くその人心の全般

宗 教 の 將 來

を擧げて之を満足せしめ得可く孔子の仁を説き孟子の仁義併はせ教へ佛の大慈悲と説く一に皆な是れ千百歳の今日に於ても吾人の等しく且暮服膺して忘る可からざるの訓誡たるや論無きなり、雖然モーゼや孔孟佛の當時に比して現今吾人は其智識經驗益々増大せり斯く吾人の智識經驗擴充せられたる今日に在りて社會の關係又昔時の如くならず幾多複雑の關係を生じ來り道德思想に至大なる進歩を爲せる今日に在りては到底數千百年の昔時に樹立せられたる道德思想のみを以てしては未だ必しもその充分なるを得ざるものあり矧んや古來の大宗教家たりし前賢往聖と

宗 教 の 將 來

雖、その智識の點に關しては之れを今日の眼光を以てすれば又缺點無しと謂ふ可からざるものなれば、吾人が今日發達進歩せる智識を以て之れを見るときは彼等にも又幾多の弱點ありて存するのみならず寧ろ笑ふに堪へたるものさへあるを發見するに難からず、例之ば希臘の賢哲プラトーン、アリストテレスを初めとして基督の聖を以てしても、尙人を物品視する奴隷の不道德なるを悟とるに至らず、俱舍論の極微論やその世界解釋は到底今日の化學物理學に及ばざる數等にして、今日の自然科學の智識を以て之れを見れば寧ろ一笑に附し去る可きものたるに過ぎざるなり、果し

て然らば斯かる不完全なる智識經驗を以て構成したる宗教的信念も亦之れを今日進歩せる吾人の智識經驗を以て之れを論ずるときは到底その不完全不充分なるものありて存するを發見せずんば非ず是れ實に十九世紀人文進歩の光明に照らして之れを考ふるときは在來の宗教はその儘にては到底吾人精神の全幅を捧げて眞面目に之れに熱衷葵向し能はざる所以なり、是れ今日の吾人が舊宗教に對して眞摯なる信仰の態度を欲き在來の宗教に對する熱誠を有せざる遙に古人に對して厚顏忸怩たるものある所以の原由又實に此に存するものとす、然れば徒らに宗教に熱情の必

要を説き現今の宗教家が古聖賢に比してその宗教的熱情の薄きを慷慨し、漫然として今日の宗教家に責むるに至誠眞摯なる能く古代の宗教家の如くなれと説くも、是れ實に難きを以て人に責むるものにして、古代の宗教家が何に故に斯かる熱誠至心燃ゆるが如き感情を以て宗教に對せしか、今日の吾人は何に故に斯かる熱情を具有し能はざるかの原由を究はめざるが如きは、恐らく現今苟も口頭單に宗教の事項を論究する人々の一大謬點にして、彼等は徒らに悲憤慷慨のみ爲すに止りて未だその原由を探りて現今の人々が舊宗教に對する熱情冷索の病原の由りて基いする所

宗 教 の 將 來

以を根治せんとするの原因療法に出でざるは實に笑ふ可きの甚しき者とす、抑々昔日の宗教家は何に故に斯く至誠息む無きの眞摯なる熱情を有しをりしか、現今吾人は何に故に斯かる自信教人信の熱情を有しをらざるか、曰く他無し、昔日の宗教家に在ては彼れ等の智識經驗は能く彼等の信念界を支配して全幅の精神を捧げてその宗教に熱衷せしむるに足る充分なる智識經驗にして、今此智識經驗の下に成れる在來の宗教を以て既に此智識經驗より一層進歩したる今日の吾人の精神界を支配すると恰も二千年前の基督教や佛教を以てせんと擬す、何が能く吾人の全精神を支配

宗 教 の 將 來

宗 教 の 將 來

するを得んや、吾人が在來の宗教を以て自信教人信の實踐躬行が基督や釋迦の如くなる能はざる所以のもの、は固よりその所にして、今日の吾人にして若し斯くの如き熱情至誠とを在來の宗教に對して有しとらんか、寧ろ是れ眞に怪む可きの事ならずんば非ず、然れば徒らに在來の宗教その儘を以て今日の吾人の信念界を律しその熱情至誠の昔日の如き者を有せよと今日の吾人に強ゆるが如きは、所謂木に縁りて魚を求め泰山を挾みて北海を越ゆしめんとするの類にして、その不可能なるや固より當に豫め察知し得べきものとす、然れば余は寧ろ言はんとなす今日徒らに在來の宗教を

宗 教 の 將 來

その儘に株守しをりて、今日に在りては如何にも無意義の行動と化し去りたる幾多の宗教的儀式をその儘に保存しをり乍がら、之れに對して至誠狂熱の信仰心を喚起せよと勸むるが如きは狂に非ざれば則ち痴なりとなす、とは寧ろ彼の在來の宗教家の具有しをりし熱誠至情の果して那邊に原因しをるやと考察し、而して今日既に陳腐に屬したる宗教の教理や無意義の儀式は全然之れを改造變革し去りて、新經驗新智識の能く人として滿腔の熱血を瀉ぎて自家の信念に對して眞面目に自信教人信の實踐躬行を生じ出し得可き宗教の一大刷新を斷々乎として決行す可きなり、若し然らず

宗 教 の 將 來

して現今の儘にて拱手以て熱誠なる信念の樹立を待つも是れ恰かも百年河清を待つと一般、譬にその結果を見るを得ざるのみならずその宗教は日に墮落湮滅の域に沉墜し去りて、迷信邪教の獨りその跋扈跳梁を肆にするに至らんとす、是れ余の忍ひざるの感情を忍び斷ち難きの習慣を絶ちて斷々乎能く今の時に當りて宗教の改革刷新を決行せよと主張する所以なり、吾人は現今の文化を生まんが爲に彼の廢刀令斷髮令の斷行が如何に功果ありしかを思はざる可らず。

第二節 宗教家の腐敗墮落は信念界不穩の一要因なり

宗 教 の 將 來

宗教家の腐敗墮落は今更云ふ迄も無きとにて、基督教の宣教師等が上は部丈けは殊勝らしく見せ懸けて内心左程の道德的君子たるに非ず、甚しきに至りては陰險詐謀狡獪の徒類多き殆んど吾人をして嘔吐に堪へざらしむるものありて存するを見る然れど之れと同時に佛教僧侶の墮落腐敗は又實に甚しきものありて存するを知らざる可らず、是れ寺院が明治の初めより在來の既得權より幾多の政府の保護を失ひたるよりしてその子弟の教育さへも満足に施す能はず、従て今日僧侶の多くは無學不識の徒を以て充たされると、維新以來佛教は政府從來の保護を失ひて僧侶は皆

無教育の頑僧と化し去りたるよりして社會に於ける僧侶の位置は甚しき下落を來し坊主と云へば眞に輕蔑侮慢の符徴と化し去りたるより、心あるものは永くケ様なる腐敗溷濁の僧侶社會に止まりをるとを屑とせず各その社會を脱出し去り跡に残こりたるものは眞に破廉恥無頼の鼠輩の群集となりたる等、諸種の原因事情よりして今日に於ける宗教家殊に僧侶の墮落腐敗は層一層甚しきものありて生じ來るの實況を呈出するに至れり、然れば我邦現今の宗教界信念界なるものが斯かる腐敗墮落の宗教家の掌中に在りて存するものとせば、斯かる宗教家には一片の誠意熱情なき

來 將 の 教 宗

や勿論、少しく心ある者に至りては孰れか又斯かる腐敗溷濁の宗教に對して燃ゆるが如き熱情は愚か、一片の同情さへ惹起こす者あらんや、否な余は寧ろ斯かる宗教家は一日も早くその痕を我信仰界に絶つに至らんとを期待して止む能はざるものとす、何んとなれば斯かる宗教家なるものは健全なる宗教の樹立には害こそ與ふるも何等の利便をも爲さざる所謂獅子身中の毒虫に外かなるものなればなり、我國現今の宗教は現に今斯かる宗教家の掌中に在りとせば、心あるものは斯かる腐敗せる宗教を満足する能はず、寧ろ之れを徹視しその極無信仰無信念の輩と化し去り、遂にその

來 將 の 教 宗

求むる所は之れを獲ると能はずして煩悶苦惱の餘その結果遂に信念界に現今の如き不穩の狀況を表呈し來りたるに非るか

第三節 政治上の改革に伴ふ宗教の刷新

凡そ政治上に大變動ありし時は必ずや又宗教上にも一大變動の之れに尋いで伴ひ來たるもの無くんばある可からず、何んとなれば政治上の改革は幾多斬新なる人文の要素を社會に輸入し従て吾人の智識經驗は自ら増大擴張せらるゝものありて存するより、在來の信念にては到底満足する能はざるものありて存すればなり、此に於てか又宗教上の刷新改革を齎し來たる

宗 教 の 將 來

や自然の數なりとす、例之ば我邦に於て桓武帝の平安朝に都を遷され政治上に大改革を實行せらるゝや、奈良朝佛教を以てしては到底當時の人心を支配するに足らざるよりして、此に傳教弘法の二大偉人の手を藉りて平安朝の佛教は創始せられたり、然るに歲月の推移と共に平安佛教は漸く腐敗墮落を生じ來たりて人心之れに睽離せるの時に際し、政治上には頼朝の手に由りて鎌倉の開府となりしより此政治上の改革は端なくも又親鸞日蓮等の新宗教を創設せしむるに至れり、然れば徳川時代三百年間泰平の妄夢を貪りて我邦人の信念界に沈滯腐敗を來たしたるの結果としては、

宗 教 の 將 來

明治維新の政治上の大變動大改革に伴ひて、宗教上の一大刷新を惹起し來たらざる可からざるや必然の數なる可きに、未だ皇政一新の新天地に於て此新思想に適合す可き新宗教の勃興を見るを得ざるは抑々何故ぞや、蓋し當代の異數と謂ふ可きなり、是れ實に我邦現時の思想界信念界が兎角不穩の暗潮を呈表しをりて動搖浮沈の變態を呈し來たりたる眞個に必然の數なるを信ず、

第四節 我邦に於ける東西思潮の二大柱流の集注

此に至りて吾人は明治維新の改革を顧はざる可から

宗 教 の 將 來

ず、明治維新の改革や元來從來日本人が日本帝國の一孤嶋に蟄居潜在しをりし武陵洞源を開放して、廣く世界萬國の荒らき外來の風潮をも等しく之れを迎へて全世界の舞臺に立ち世界の諸強國と比肩對峙して中原逐鹿の事に從事せざる可からざるに至りしの時なりとす、此に於てか元來我邦は印度支那に發達せる東洋諸邦の思想の潮流を千有年來繼承して、更らに之れを我國人一種の性格に由りて鎔鑄淘治して、儒教思想佛敎思想皆な特種の發達進歩を我邦に於て營爲するに至りしより、我邦はその邦土の面積より之れを謂へば狹小なる實に巖爾たる東海の一孤島に過ぎざるも、

その東洋思想の相集りて豊富なる點より之れを謂へば實に尢然たる東洋思系の一大パノラマ的偉觀を呈出しざる者なり、斯くの如く東洋思潮の偉大なる一柱流は既に業に我邦に存在しをりしにも關はず、明治の維新は開國の詔敕と共に外來の思潮一瀉千里洶湧汪洋として巖を嚙みて流注し來れり、此故に我邦は基督出世當時に於ける埃及の歴山府に類し、而かも之れより尙一層雄大なる激勢と強烈なる前進力とを以て外來思想は我信念界を卷席風靡し來たれり、此に於てか之等東西の兩思想は地の相距る千有餘里世の相後くる、千有餘歳の今日に於て、初めて東洋の孤島に相

宗 教 の 將 來

會見するに至りしかば、之等兩思想はその互に相知らざるの異國に發達生長したる思想の事として互に衝突し扞格相容れざるもの少なからざりしは又止むを得ざる所にして、今や我邦の思想界信念界は之等新舊兩思想の衝突矛盾の結果、舊信仰既に亡びて新信仰未その樹立を見るに至らず、信仰界の風雲は頗る險惡なるものありて存するを表はすに至れり、然れど是れ實に今日我邦思想界信念界に於ける又止むを得ざるの結果なりと謂はざる可からず、而かも吾人は一日も早く之等思想信念の動搖をしてその鎮定を得せしめ、以て健全なる新信仰の確立を期待して止む能はざる當に

宗 教 の 將 來

一日千秋の思のみならざるなり。

第五節 ユニテリアン及び所謂佛教の自由

主義

西洋に在りては本世紀に於ける人文の進歩は、彼の嚮者に既にルーテルの改革せし新教を以てするも、尙吾人の精神を満足せしむると能はずして、此にユニテリアン主義の勃興を見るに至り、我邦の佛教界亦全然舊時の面目を株守しざるのみに止らずして、幾多有識諸先輩の盡力は頑迷なる佛教界中にも多少の新生氣を輸入し來たるに至り、その極今日に在ては世間より佛教のユニテリアン主義と稱せらるる、佛教の自由主義なるものゝ産まれ來たるを見るに至れり、然れどユニテリアンなるものはその主義如何かにも茫漠として捕捉し得可からざるものありて存し、同一ユニテリアンなるものも人に由りて大にその見る所を異にしざるものゝ如し、例之ば或一派のユニテリアン教徒はユニテリアンは元來米國の自由なる基督教信者が集りて創起したるものなるが故に依然一種の基督教徒なりと、然るに之れに反して他の教徒は曰くユニテリアンは宗派に非ずして主義なり、ユニテリアンは思想の自由を尊重し信念の健全を貴重する所の協會なるが故に、何れの宗教を奉ずる所の人に在りても苟もその宗教

宗 教 の 將 來

思想にして自由なるものたらば、苟もその信念にして現今の科學哲學の思想に照らして健全なるものたらば、その人や又眞に是れ一個のユニテリアン教徒と稱し得可きものなりと、若し此意味を以てせばユニテリアンなるものは佛教徒儒家神道家者流に在りても、尙ほ苟もその信仰の健全にして迷信ならざらんか、その人や又明かにユニテリアン教徒たるを得可きもの、此點より之れを謂へばユニテリアン教徒なるものは、必しも基督教信者たるを要せざるものとす、斯くの如くユニテリアン教徒なるものは、頗る寛容的にして苟も自由にして健全なる思想苟も自由にして健全なる

宗 教 の 將 來

信念にてさへ是れあらば、それは一切之れを收容して自家藥籠中の資料に資せんと企てつゝあるものとす、ユニテリアンなるものゝ取る所の主義や夫れ斯くの如し、然れど余は今ユニテリアン教徒の斯かる寛容主義の漠然に流がるゝを批難せざる可し、唯余は今日斯かる寛容主義の一切の教權を見捨て、眞理是れ求め健全なる信念是れ欲するの自由にして熱心なる求信者の基督教と多少の縁故を以て生れ出で來たりたるを記憶し置けば足る。

之れと同時に佛教の自由主義なるものに至りては廣汎なるものにして、その名は佛教と稱するも果して佛

宗 教 將 來

教てふ特色は那邊に在りて存するやは吾人實に自由主義佛教徒に對しては之れを怪まざるを得ざるものとす何んとなれば彼等はユニテリアンと同く一切の健全なる智識信仰を普ねく之れを網羅して、更らにその上に健全なる信念の一大厦屋を建設せんと企つるものなれば、決して佛教を中心として之れを飾るに、他の宗教や學術を以てするものに非ずして、一切他の宗教や學術やは皆な自由主義佛教徒がその佛教の健全なる思想と共に同位に置いて之れを尊重しとるものなれば、彼等は佛教徒と稱し得ると同時に又基督教徒とも稱し得可きは論理必然の結果なりとす、然れど余は

宗 教 將 來

今彼の所謂佛教の自由主義なるものを分拆すれば斯かる論理的齊合を缺くの嫌あるにも關はず、特に之自由主義佛教徒に對して在來の舊佛教徒よりは望を繋げる所以のものは、彼等がユニテリアンと等しく、時代精神の趨向する所に早くも氣を注ぎ心念界苦悶の今日に當りて、早く既で之等の精神的需要に應ぜんと欲して、單身健全なる信仰の樹立に努して清廉自ら守るの潔きに満腔の同情を表せざるを得ざるものあればなり、否な我邦人の中以下の迷信を以て自ら甘んじをれるの愚夫愚婦は姑く措き、中以上の智識を有せる人々の信念が日に此方向に進動し來たりたるは覆

宗 教 の 將 來

ふ可からざるの事實にして、而早く此機を察するあり彼の自由主義佛教徒なるものが卒先自ら奮ひて健全なる自由思想の鼓吹に盡瘁し、健全なる信念の樹立に鞅掌するは、余の大にその勞を多とする所なりとす、然り而て現今我邦に於ける中以上の信念界を支配せんが爲めに斯かる寛容なる自由主義の漸く行はれんとするの狀況を表呈し來たりたるは、早く既に東西思想の我邦に於て比較研究せられて東西の思想各其一長一短あり、互に相輔け相補ひて此に初めて今日の人智に適合せる吾人信念の健全なるものを樹立するを得可しとの一大確信に到達したるの結果ならずんばあらざるなり。

宗 教 の 將 來

其他輓近に至りて我邦人が彼の東本願寺の改革運動や宗教家懇話會や曹洞宗に不満を抱いて分離獨立して起れる救世教の勃興や、其他幾多の舊信仰を以満足せずして或舊信仰を改革し或新舊兩思想を融合調和して更に其上に一大新信仰の健全なるものを得んと努めつゝあるは、實に現今我邦に於ける時代精神の要求なりとす、知らず明治の佛陀廿世紀の基督新世紀に於けるルーテル親鸞たらんとするもの果して誰ぞ。

第六節 最近我邦に於ける倫理運動

佛基兩教の腐敗墮落怪聞百出、到底今日吾人の精神を

満足するに當らざるものあるを發見して、佛基兩教に聯想し來たれる從來の迷信を、觀念を忌避し、斯かる習慣的に來れる一種不快の聯想を去りて、卓爾として眞摯に健全なる思想信念を中等社會の人心に普及せんと欲して同志相結び、決然として奮起したるものを彼の丁酉倫理會と爲す、故に丁酉倫理會なるものは基督教信者の系統より出でたる人も、佛敎の系統を引けるものも皆な等しくその中に網羅して、健然なる智識の下に道德倫理の修養を目的として起これるもの、然れば此倫理の運動表面は宗教とは殆んど何等の關係も無きものゝ如く見ゆれども、その實は從來の宗教の

宗 教 の 將 來

到底吾人々心を満足と與ふる者あるに足らざるを觀破して、更らに斬新なる智識の下に健全なる道德的信念を樹立せんと企つる者にして、畢竟一種の新信仰新宗教と稱するも毫も不可無き者とす、是れ實に余の嚮者に第二章に於て一言し置きたる歐米に於ける倫理運動の模倣と見るを得可き者、彼の歐米に於ける倫理運動なる者がその名は倫理運動なるも、その實多くは在來の基督教を以て満足せざる人々の集合より成り、非宗教的態度を取りて行動云爲しつゝあるが如く、我邦の倫理運動なるものゝその外面こそ宗教には何等の關係無きものゝ如く見ると雖、之れを以て健全なる

宗 教 の 將 來

宗 教 の 將 來

吾人の實行を促がすに足る信念の養成を以て窈に期するが如きは、確かに一種の宗教的運動とも見ざるを得可く又一切の成立宗教に不満足を以て勃興し來たりたるとの點より云ふも亦確かに一種の宗教革新的運動なりと見るも毫も差支へ無きものとす、果して然らば此に至りて吾人は須らく熟慮一番せざるものあり、何ぞや、斯かる一種の宗教的運動は何が故歐亞を問はず現今の社會に發表するに至りたるか、その原因は果して那邊に在りて存するかとの疑問是れなり、曰く他無し吾人々心は最早到底在來の佛基兩教を以て満足し得可からざるものありて存するも、去りて又無

宗 教 の 三 將 來

宗教の甚不可なるを知り何等か他に健全なる一種の信念に依りて安心立命を企てんと欲する至情に出づるものならずんば非ず、果して然らば是れ又現今に於ける吾人信念界の動搖不安の有様を事實に於て説明しとる所のもの、實に健全なる信仰の樹立は我邦に於ける目下の急需焦眉の要務なりと謂はざる可からざるものとす、吾人が今や斷然として舊來の佛基兩教を以て満足せず、荐りに新信仰の確立を絶叫して止まざる所以のもの亦實に此に存す、是れ吾人が彼の現今に於て徒らに公認教運動など稱へて田舎の愚夫愚婦の一揆を煽動しとるものに比して眞個に價值あるの行

爲たるを自信して止む能はざる所以なりとす。

第七節 人心の根本主義を成す可き宗教

既に第四章に於て論明せし如く哲學は吾人の究竟的證信にして吾人に安心立命を與ふるの要具なり、然れば此に至りて哲學は全然宗教と同一なる者なり、然れば宗教と哲學とは少くとも此點に關しては全然同一にして將來の宗教はその根本原理としては必ずや又哲學的ならざる可からず、換言すれば哲學が一切科學の提供する歸結を組織統合してその結果に得たる智識ならざる可からざるが如く、宗教亦之等諸科學の結果より得來たれる健全なる信念ならざる可からず、然

宗 教 の 將 來

れば將來の宗教と哲學とは畢竟同一にして宗教は各科學にその應援を依頼せざる可からざると同時に宗教は哲學と同く各科學以上に進みて人生究竟の證信となり人生の根本義第一原理を形成し人生をして由りて以て活動せしむるに足るの第一義たらざるべからざる者、然れば此點より之を謂へば若し彼の倫理運動なる者にして單に之等根本主義の涵養を顧みずして單に其枝葉たる倫理道德をのみ説示する者たるに止らば、それは恰も學校に於ける修身科の講義に類し、而して修身科の講義が在來の經驗に由れば餘り功果無きに終はりたると一般彼の倫理運動なるものゝ案外に

宗 教 の 將 來

その結果の甚少なきを杞憂せずんば非ず、何んとなれば、這般の倫理修養や近頃發表せられたる福澤翁の修身要領の如き、單に實踐躬行の個條を臚列したるもの多く、その實踐躬行主義の由りて出づる本源に至りては餘り深遠なる考察をも費やしをらざるものなれば、吾人は尙之れのみにては隔靴搔痒の感無き能はざるものなり、必ずや何等か根本的に一切の倫理道德の實踐躬行は皆其同一淵源より混々として湧出し來たるの一大主義の樹立即ち健全なる信念の確立を期待して止む能はざるものとす、蓋し人心にして斯かる根本主義無からんが、恰も一家に於ける基柱礎石の無きが

如く、人心は飄々然唯風の間に々々南に遷り北に向ひ流れに従て上下するの浮き草たるに過ぎず、又何ぞ大決心大勇猛心をも生ずるを得んや、是れ恰も一生を醉生夢死に終らんとする者なり、是れ豈に人生の最大恨事大丈夫終天の遺憾に非ずや、嗚呼彼の基督と云ひ釋迦と云ひ一は天帝の直觀に由りて一は無明の理を達觀せしに由りて能くその根本主義を獲得したるを以て共に迷羊の教主一切衆生の大導師として數千年の今日尙其餘光赫々永く吾人後昆を照らすの燈明臺となりしに非ずや、余は斯くの如く自家信念の大根本義に由りて活動し自家信念の第一義を取りて死尙變へ

百七十二

ざるの人を稱して之れを自主自由の人と云ひ自ら大自在力を得たるの人と稱し之れを以て天上天下唯我獨尊の人と斷言するに躊躇せざるものなり、吁嗟今や斯かる健全なる根本主義を現世紀に於ける發達進歩せる智識經驗よりして獲得把持し來りて之れを人生の實際社會に應用するに至りて初めて彼の不健全なる思想信念に代ふるに健全なる信念を以てするを得可く、斯くの如くして吾人は初めて釋迦基督の精神を繼承し之を今日に實現し得たりと謂ふを得可きもの、是れ豈に人生の一大快事に非ずとせんや、若し夫れ彼の徒らに死せる經文の一字半句の解釋に泥着し煩瑣

的宗教問題に拘々し、あられも無き政教問題に狂奔する輩に至りては眞に佛基兩教の敵と謂ふ可く、佛陀基督の罪人に過ぎざるもの、吾人又彼れ等に向ひて更らに又何にぞか道はん更らに又何にぞか道はん。

第八章 將來の宗教

第一節 佛基兩教の一長一短

既に前七章に於て論明せざるが如く今や我邦の狀況は東西兩洋の思想の會合府爭鬪所たるやの觀あり之等思想界の異要素は互に打ち亂れ入り紊れて混合し化合し來たりてその結果一大思想信念の醱酵を醞釀しつゝあるものとす而て今日世界に於ける宗教界の二大明星と云はゞ何人も指を佛基兩教に屈するに躊躇せざる可し實に苟も將來の宗教を思ひ而て將來の思想は過去思想の歴史的發展の結果たる所以を惟はゞ、將來に於ける宗教は必ずや當さに佛基兩教に負ふ所

宗 教 の 將 來

多きを豫想するに難からざる可し然り而て佛教基督教共に是れ偉大なる一宗教にして一は東邦全土の人心を支配し他はその起原は佛教と等しく東洋に取りしと雖、その教域や主として西洋に在りて存し、從て各獨特の發達史を保有しざるが故に、之等兩教の何れを以て果して絶對的に他を凌駕するに足るの宗教なりとは到底斷定し易ずからざるもの存りて存するを見る、蓋し一切の事物には皆な一長一短ありて存するとは免る可からざるの道理なるが故に、佛教獨り眞理なるに非ず基督教獨り非眞理なるに非ず、佛基兩教とも共に眞理なる部分と非眞理なる部分とありて存する

宗 教 の 將 來

宗 教 の 將 來

を見る、換言すれば宗教を分類するに眞偽を以てするの到底今日に於ては不可能なる分類法なるは前既に之れを論明し置きたるが如くにして、從て此科學的不偏不黨の立脚地よりすれば宗教は佛教獨り眞理の化身に非ず基督教獨り眞理の權化にも非ざる可きは何人も能く容易に首肯し得可き所のものとす、試みに一例を以て之れを謂はんか佛教はその發達は支那に日本に幾多印度と異なれるものありて存ずるは何人も之れを承認するを得可く、特に日本に於ける淨土諸宗の發達の如き恐らく彼れ原始佛教徒をして今日に在らしめば之れを見て恐らく外道なりと排黜し去るや

宗 教 の 將 來

必せり、斯くの如く佛教はその發達頗る多種異様にし、て殆んどその原的形式を亡失し去りたるもの夥多ありて存すと雖、而かも尙印度特有の認識論的絶對的幻妄論や唯心論的無宇宙論の痕跡は之れを隠くさんとするも隠す能はずして時々その鋒鏑を暴露しつゝあるは疑ふ可からざるの事實なり、是れその佛教の缺點なり之れに反して基督教は徹頭徹尾猶太的の現世思想を繼承して起こりしものなるが故に現世的思想に豊富にして此世界を解脫蟬脫せんとする印度風の壓世思想に欠きを有るものなり、是れその長所なりとす、然れど之れと同時に基督教の神は猶太的エホヅの思想